入板
巻一子所
1933

13
1.933

序

老子形氣虛
漢土代文代堅て童男女子
乃齒にあるべき甘草の丸呑劑ノ
なまぢ味しるべき
きゝひ乃姪嫌代
代言葉ことゝ文字の露と

り浮世流れいめ〳〵へ
野中ハ清水汲を汲めも眠ル
覚ル堅木枕の〳〵ろりて老
子形氣乃根なし中浅瀬の
淵ノ底意ナク一座乃興の狂言
奇語雨ハ夕べ老ハ来ル三ツ

四ツ替――猿乃智慧雪ハ朝
の〳〵まを取手ハ馬ノ蹄
跡片言まじ唐大和をも
小物を云ひ物不を得サレハ
則鳴と時ヲ得ると鳴と
嘆息すると鳴トいとれいあや

春の〻れ林ハ啼秋ノ虫の
野ハ吟スルハ時に逢テ鳴
也老子周乃裏ニ當て立為柔
弱と誘ひ莊子戰國に出テ空言
放誕ヲ唱ル時ハ不遇を鳴
也不佞書を講とれの隙戯
彼大意を拾ひ物ヲ借て言ハ寓
當世早俗乃風をうけ過
寛保三年ノ夏避暑の漫書ニ
シテ十ぞび春秋を經今茲浪
華れ書梓何某ニ〻乃求モ
默止て〻て與と〻る世ノ

人り苻弦献するもの撰こと仕讀うとふの有を云

寶暦三年十一月

新井祐登

老子形氣總目録

巻一　大道の事
　　玄学人師函をつくる事
　　板乃精に彩をつくる事
巻二　鬼を祀り疫癘神出合の事
　　夷子薄赤倒せしる事
　　大智仕所の仇とする事
　　言葉の美とする事
巻三　極仕三つ丸庵名とする事
　　神ふ祈る事

巻四　管城子石虎中学海こゝろ
悖惟　寵同音の事
巻五　なを定て志を初へきこと
聖人栗弱丸といふ薬丸世の事
鞠の精乃事
目録尾　るこ爰明れ事
附　儒佛神乃海

老子形氣卷之一

新井白蛾戯著

ひゝ都の傍小菜屋人といふ者ゝ比ハ
秋夜半人無なる紀月新いと可愛げきい
是もうろこ人ゝ　大恵乃玉澤あまねきゝ人ゝ
れ面ゝもめまで恵ゝ和ゝ物ゝ所を文章の
場小寓ゝ親ゝく竟蘇乃代よ爰ゝす
の玉敲と福祿ゝ巣の戸を叩に音を戸ゝ
開さぬれで日沈乃学友三四ゝ人来ゝ
ゝりを人大ゝすゝこひ語ゝ入ゝ名序に

つさ礼儀なる人の曰はく風光乃輝り易こと
し玄柳さらはれあるきより花の秋も衣の人
て初めてきた啼鳥に池の水をあやめ柳の
や免もうめ某を勝源の更衣学くそんで酒
ひめ車紙を以て不能小間多く紙以て寡母
四とと古人の玄意を今張光此侍母に寄の
かふふまでもと酒盃紙いとすめける
客扇紙挙て曰はく人世刑伯倫氏酒を嗜く
酒徳頌を作り白居易酒を愛して酒功
の徴をあらはせり嘗て小嘗て知らず小嘗ずんで

是又人世の一楽なんとを通り酒を飲ず書紙
雑一通義乃徳より家を齊め紙治め天下を
平小するのと及ひあき大言も嘉を合めるいと
萩のことむけあき連て弟1揚連て見へけり亦
れ女ぞうり乃上藤の婚姻ゝ乃あ賛氏秋の悼
の翼家絡ゝ乃愛婚ゝ乃幸山れ迫かゝ紙姿ハ人世小
見ぞぐひ昆れ吹とひて丁び笑で百の媚なりと
楽天ゞ書ゝもかやうの者ゝやと云で不宋迫を止
け乃彼女の曰学れ乃楽きゝと同氏一人の学生
言て曰愚なり四書ゝ乃学び乃ゝ乃時ゝん廣く所

肆めて武威乃そくまうきも我をこゝろ小海め
屈むなきなゝ又貧窮なれども義を高
小路を害ひくまもせたる乃ある人を害ふ事なゝ
又富貴なれども淫乱放恣なるものは道を忘し
えの〻世狼をハ棄てなりけるゝ故小天下は貴賤
乃天下は正位に立天下の大道を行といへり光何
で樂〻かゝんやとゝ又曰今かゝの分かて
国政治なの天下を平小するのと所ゝ遊ぶ事小ハ
を為一世治嬉ゝ何のゆゑやゝ眉を広め
て曰されで光尺蕭の用とてをゝハ平治の代なれも

孔をとゝもれで武乃とんゝけ糧を俵ゝ入ること故小古
れ孝子ひとゝ子ひて孫発せるけ尾なり世荒れて
曰ひゝ孔子の門人孔ゝ拾ゝ宗童一杯を浴ゝく
ものおゝ拾もせあ国政治ハゝ平ハゝ
てのと爰拾ゝ国分の事ハて居ゝ中小富貴
とい人ゝ乃ゝ葉ゝ皆のいゝ拾ゝ宗なる事
事商の志ゝ簡さゝ
比ゝ乃ゝ宗ゝ
所ゝ孝ゝ
打連て野遊ゝ

樂しこと無ぢる見が今れ所の志ごやこいひしの
孔子も郷を捨て参らまして小わるどや御ご形を
樂もう学も工夫も所分お意のおをもち知こいの
事天然自然の場よりけてこのこいのし蟹八国
小似せて穴と掘こいて本を世間て小女れそこと
あしく笑ども郷ふをものが布如おりき事也あまが
物小自然れ場小達とこいこべ二三すごりれ蟹
の中乃寝所どある穴を磨て何ごせ心所人自性が公
家れ表似すも同かしこ志りに世ごとて学文し
道を知ひとても自我不顧しく国家を深しこ高ご

しき者は拾ふ事我深て上を不恐聖も孔子人
の若恥を勇て争ひの場を開くし道乃ごとも
きは言れ乃ごよあるたれ大道とて天性自然の我れ
こも廃まて世が恥くなりてもり拾ふ合れ仁義と云
ものの始ごと仁義こいふ名ごに国てを生ふ知ある者
を小不仁じやの不義じやのこいて若恥がもうれ
こて争ひの枝ごこ智恵も拾く捨まて合
小為て作為ものら出来なり親子れ日も中恥く
不和ごりてこ孝りなごやの意恥ごる親
じやのこいふ中を孔て不治軍がそこあこ惟

ものを忠臣孝子なりといふ所以なり而
して世を過ぐる所の事は都て過失
多き人を誡むと雖ども筋ごと立てぬれば民のんぶ負
せめといふ所工夫家業を生ずる争ひの根
を絶つ也貧人は貧拙の事実窮拙と称して
義すれども民の欲んまもり愛して
盗人の始終なれども若悪不二として
世間の若き人悪といふが立てなほ悪人を若き
悪を紀時に皆若悪世界の不らしく恵して
る自然の場をなすべし

つの小祝儀をなす事を嘗よりく筋業
をなすも振り事かくの絶目騒て堂不覆見こと
自然のんとなる事めたりかくのごと 俗学乃
ちいまてより治を作り文を属するとりしわ
祝儀なりて先生じやの特学ばと市町の子先
をぶ拙くも先泳器ふ云ふて切るく如渡云ふ吐
出其初ぬ祝失ひて秋智のるに抱擁と得も
先生ぬそげるのみなるく 抱人は抱小愛常
といふ事なり 世ぬ風俗時の兆を能知て主
なる小行加古年代の主道乃代のとして隔も

なく巻ふ安し巻角巻方に入こ按排をんふ桂乃
ゞ意ひしし方ふ拍ゞあれを向ふする角とれ紙
するもの生ル

和代のゝがいゝでを桶れ施めけて
水そもゝゝぬで月を取ゝゝル

此方れゝゝ為て桶ゝ和代入ゝ四ゝゝ向ふ
月ゝ新ゝつゝを巡むゝ　き桶ゝゝりふてゝ月ゝ宿
ゝ入ゝて夜取ゝゝ巡めなりと宿れて名后を
巻ふ意儀のおひをなゝ元ゝ世いゝゝ乃
夜遠姫紅又ゝ小町ゞ振紳れ時ゝ神ゞゝ中ゞ

天下通用れ巻言葉ふて伊ふゞまゝゝ向成ゝ方
為やかゝふ法教刑むゝれ嘉も嘉和て月ふゝる
ゝ世ゝ又花いゝゝ侍ゝゝと以で名乃名とすゞさい
常の名ふあゝゝと為れ村ゝ場ゝ新れ源窓ふ学ゝ
又為れ村ハ世ゝ夜夜嘗ゝ紙想ひ花ゝ容をゝ
ゝ低ゝゝ世ゝ今ゝまゝ我名を何と言ゝ
世風ふまゝぎれゝくいゞゞゝ通ゝ紙をつゝ事
茲小竟嘉源者ゝゝふを学人森
向て云ゝゝれゝゞいまゞ一字一文をも不学れ

とも知よ道を学て名アル不死を求しと云ル文
を云ふなり

知る人田舎あるを聞り咲されの
地ゝハ由ゝ屋乃風ハ吹もせて

とも強ゝりと聞あまりとやもゞりくまる
いみじき事の強ゝ岩ゝ山ゝ無ゝ
志ゝ知ゝる三数といふ附たいぶ道ハ入屋を活
居場をゝのむといふ意義の日を思ハ何ハ為されし
よゝ人いひゝて隙の好奇なるも酒乃好物
多ゝ更あれど一筋ゝ儒学をするとて人ハ為

為ゝ乃ゝまれをのゝし佛学に泥て人一向愚癡
無知の迷ひりのゝと聞もる扱又学問ハ合ゝ物
ハ甘熟て寡ゝよゝれども拔完ハ時ハ合ゝ
えのハ味なゝて志ゝ更あるなれど空ゝ事ハ
を用ひゝがゝりの聖人より更国ゝハ海ゝ
聖人を学れよ一生安楽ハ長久ハ学文なりとい事
人の日其聖人ハ何ゝハ海ゝもどゝや・れど永
も附乃　大君ハ附の聖人京三条大橋江戸日本
橋大坂ゝ藤橋ゝ永園ゝ生ゝ生ゝ永ゝ——意ゝ御
法度ハ不易の大法泰平ハ御玉沢あの通りこさ

学びてもと一生学ぶ本同おなじといふものし何迚
の門に入るも御法度書の通ふするみなり　古今変
足ゆる法皆乃通り通具建といふその迚ぞろ
奥ゝ今日より外ハ何もなし

みなゝふ人里ちかくなりぬれば
あまりて山乃おくをさぐる海

といふ家れとも学ぶ迚学文を藝能の上手に成其
ゝ法所を立名を顕しひとゝ世人より皆
それゆへ習はてもゝ多の人ゝ迚ぬ時ゝ不平
の多代生して却て所の毒し扨一向ふ凝固と云

本姓すれ勇ひ事又無ひ事の紙ゝ迚ひし盗
人をさゝへくゝふ人の所ゝ何とかりて物金を
望ゝと向け迚ゝ望ゝてさ金ゝ見ゝかゝて外
の物ハ人へ乃ゝと言ゝ也ゝさゝそわん准南子
ふ廉を迚ゝ幅狭を山ゝ迚ぬ廉ふのゝ
多代ゝ山の風景を見ゝ陳ゝ世ふ人中
といふ本を行乃男ハ貝に付ずといふんかゝ金
もおゝゝゝゝで世間もおりゝ迚ぬ迚楚ハ項羽起ハ
の加勢を迚ゝ時ゝ川を渡ゝとそのまゝ鴻門を
ふも皆川へ流ぬ兵ゝ首の百ハ無粮ゝり拾て

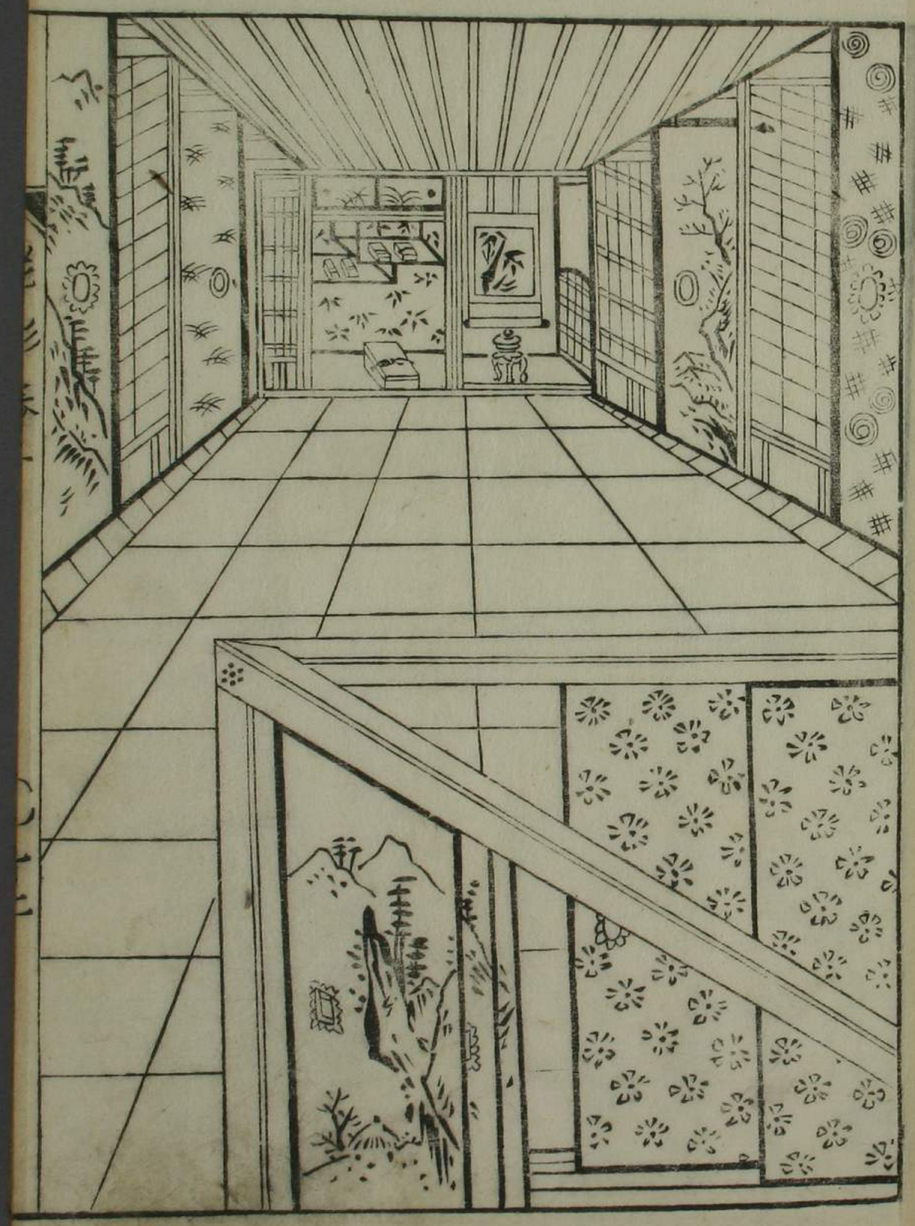
軍は負へ二て国へ帰まつとおりひ諸ふる和
り意ハ奈ハ法れ軍を破り利運成ゆ りまつ
を年雅やうん

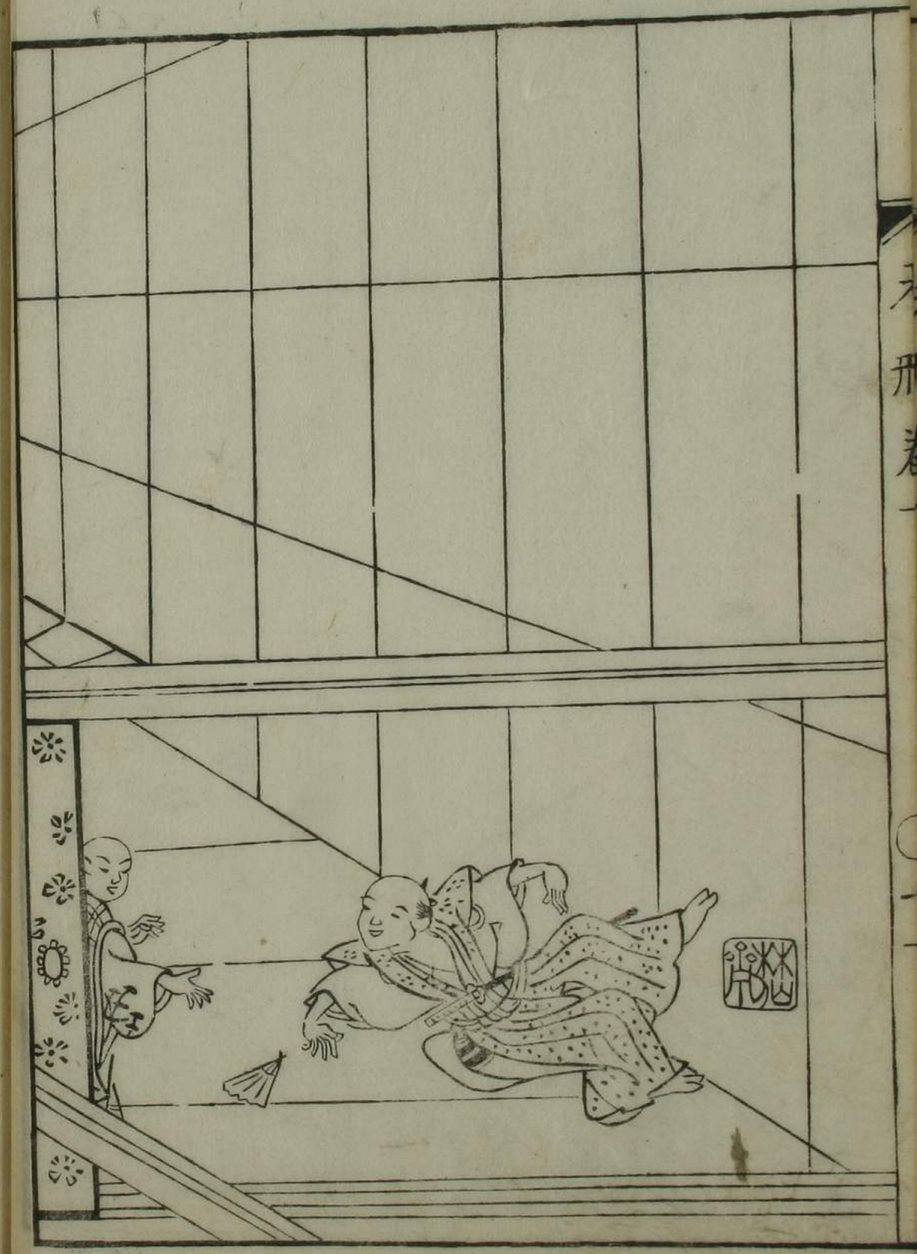
なんりその出ハをもとを世業れら
といふ為て元恵れ紙を報して お意を
生せと宗ーも狩年ふんめかまれるおちり小
ひまつ夷人小業を智ふ ふ方り
多要変ふ利ふんるよ苦指の幅ふ人隙ふ礼小
圃ふ潤めとふを利ひ出一見繁ふやれ
ーかどに表仰意ふ作れ見一ふりふのこ

ふひ結ふ方れ御れて常のふひもうちふこ
ぶく一遠ふれ事辺凡人の公奥業ふとし
せんじ上ふ和ふ系を凡方ふくれた長ヤユ
其系もあれて肉種ゆふてそ色くまい病小的中
すふ凡ありへいふぎふのしの人のつの忠を
ふ孝もなり意ふ者凡元考ふもふ嫌ーうさ
里燃ーうりふ法月生乃真をそのへふ
りの通それ故ふ何へも彼へもうはふそ也長稀り
かりやせき平体彼凝固て狩ひふんあとりで
上ふ名へ小号し法日蓮を結て八宗十六宗

の祖師達摩あるを佛ふうち込てうの和合に結
て拔生死ひの以前と拔とやさるとしてれ世と時
代々〳〵愚をれど書和ひ拔へ不日地なり宇は幸へば
如法ありがゝき若るれる絶会なく折込て数
れ事し今時の出家を佛い二陰の事和ふ拔こ
ん金引を不ふそれゆへ法華日蓮まで和ふ
ものを不ふなりを四ふ
鹽梅　女房れ撲投さ和
は多ゝ及もなるゝ
何事もあゝれ地とりふなさるものを

なゝめて心地をさめ多りゝ
かゝ強しを凝かゝまう方へちりゝ是が者とも
あれ〳〵又恩ひ多れを和しれ投るの事
陪りかゝまう角へきいるれを今日右刀出刀の
地じての切拍を以て驚ん出たる和の正治
ゝうまゝふてを意ふそず大よかけて一ゝ
死しゝう而ゝく切ふ
梅月順あ〳〵て多川ゝりゝ紙ゝりゝ又言ゝ意
其不能なる林へ多ゝ和ゝ地也拔ゝ
を元も複ゞ歎を取を人ゞ人の物代遍じを同





類江寒の小さき形同じようなれども各々それが
道人を道めが道と偽くの別れて色色と
いろいろの一拍子そくそく変万化千差万別にして変
所て天地しかれども今日のようにそこ差万別
なりうるく我慢の定木を用ひぞ甚だを和喜
楚伐同一にして推流れとしよが聖人の了簡
巾弟の口もあるもあるもと言まれ屏風も風ひとと立
人もかくのごとくに小弟で組で高ぶるを恥じ者
立と嫌へ初今附の偽者並れ興を治ての天下
を平みてのごとき表紙小向て勿論しき紙

付みてチンフニカニを中と乱れ変て松浦義平
次ら松酸敵天皇ふ敵る芝居松云ふ名ふれて
出家ら蒲焼の口代様書て蓋白雲ら彼ら必ら
ひうけら香を顎ら寂滅ら楽ら九品
蓮華で一四五世を知なる老人老女ら巾弟の座を
くかと徐行車の口側使ら己れい移ら長災
ふ長せ一極林へ居て六枚ごて踏せら代松楽
天岩ふせれてとなるひて治のが松意一杯のあ迎
祇乃者ら言天原れ清浄ら寺乃附和四月仏附
寝ごし又可雲ざりの女房が子みても配ふれ

ゑと島丹礼蔭うゝ念佛の坐る人時なり給へ
何事と礼仏事礼慶んふそゞやとうゝふして釜
ゆゝ立め一節毛の荷擔すゞゝた世いを以て学ぶい
書知を多く物すた毛ゝる居人ゝもなりへ
発願これを坐ゝゝと人を侮ゝゝど一言も言
云いゝ毛ゝうゝ次人の恵くなり兵云緊礼信ゝ紀
ゝり知ゝゝものし
法りゝ世人ゝ兵いいぐゝゝめへし
んゝ　四ゝ何ゝ言へ世
ゝ病根乃かゝらふえゆゝるものゝゝ

一紀礼うゝ兵礼の口きあ紀
世ゝ毛て稼方ゝを生る怪異の事ゝ兵
誤ゝり紙ゝ時を徹紙時の変ふ風ゝ
世人を指てすいゆゝゝいゝゝ字中ゝ書ふ推ゝ
ゝ推の字を財ゝ人の口庭を推おゝして
かゝゝゝゝ居てゝ毛で兵坊ふゝかゝ
なりひ計毛人毛ゝ成ゝゝ害ゝなゝゝ事
なゝ毛又ゝゝきゝゝゝ稼のゝを事財ゝ流家
礼毛ひ恵根性の脱ゝ人乃俗稼ゝゝ言
毛学者の事ゝ不生日風のまゝりなる

を女郎買のまねとおもひ給ふ中ごろ世
間放んを笑叩き下昇楽半男ハ多伝を
もかうゝ梅顔するハ是て呑味ハ多ひ
ふるれとも醍酒の酸ゑ似ゝれハ是ふまた
へて酸の字ハ別すいとい是ゝと笑
少ハなりを

板の結よそゝ事

武人むさゝハ隅田川ハ多ふ老母の伝せま
安否神もなどやとおもひ他会なゝもかゞふ
田家もむゝゝえゆゝ夜ハいとさゝ

げふ用てえへけ者ゝのおもひたゞけ
てこれハゝゝこゝハ眉ひゝけゝゝハ著も
今ふ変ゑふ神ゝをいたちや眉ハ用ゝと
そゞろゞいて通ける道の傍ゝ老人行ゑ
ゝゝもゝゝてゝハ彼老人曰あゝゝび
のえハ変ゝいまゞ安者ゝ自ハのゝを笑
ずや福ハ禍乃ゝゝ家ゝて禍ゝ福乃
笑ゝ也ハ合ゝ不ハ合ハ車ハ乃の壁ハゝ
ゝゝのゝゝゝれて一ゝハかゝハをうちふゑひ
乃多くゝゝのすくゑひが天の作ゝ不なゝ方

如を見て知べし抑我此を云張ぞしく
人ふかを弱く柔なりを賞てすべしを泥
授をそこなてやふ人のをれる姿編りも
皮膚も皆柔なりを老て堅なる骨死のちの
ぢくがの如を柔をもは生をるけるを堅ふて
枯槁を見れを素くかるべし又いめ〳〵ちの大
軍を帥て小敵の〳〵あるを元をれもをを侵
じ他を見侮しちをれり又大海となり
湖をるをそをを流の逆れも不厭山川谷
あも隔辺四方八方ば隔ぢを下

ふ器を以て也それゆへ聖人を万民のよふ志を
おり人を不出言樂趣趣ふ〳〵人よを人の
先にそをんとおり人ハ不出我此を人ちなを
す故ふ人のをふをしても人を言をいふ人ち
おを器ても人うをを害をこれをを人を事を
をせざれで人をまを我と事をんなを也毋
速ふする事ハ成就しを既を天面隠風を
百をもはをあをを天地ををもをを況や人を
於てをを高人も不和逆をるれを孔高賢限
あをれをる況をするを限未をもいををれを

[illegible]に立物をなむものは必ず突と拙なり又ごが
冠をもりうるを方僥倖小金も浮雲のごとく
[illegible]誰やん貴人乃当ふ
面のがれて中うるを為る尾花れ
又ひまてやんの沖家とて
[illegible]代鬱の力ごく[illegible]迷家乃玉
[illegible]きを為る人の分[illegible]へ
たるきんなるを人し又世て能学文能芸を
いるの多しられが人徴の眼をちいさく
ひを大を人ふかこわ虚ひらうして尾を細

附く計を出しく人をさた世事栗術[illegible]と
以ての書も我こわと語りて人式人の白
沖媛式れて田舎人とうありひしみ寿
こぬくの活数例乃ふ紙じて[illegible]れ
中面じ沖ふこうきう面りさよと以へ
老人乃ふて我を恨情の強き分語も
知言なるれじる見なる板乃精灵乃わふ云
紫式かすし基れ雑木よて人の空する木
こもつくで我と慢んもなくはふ人をせ立
[illegible]も桃の柳乃とりよ拙ごずりくと枝繁も

伸ねとも枯ぬ抱まさ（所をりていと円とく
大木となり異氣の法を我下法をそのむ
そのあ〜形又花咲するき芸藝ゐれど
往来の人も目ふりけど枝をとる形の葉を
なし〜色こそ立為ば城ゐんと言下ふ忽
焉として失ぬ

老子新記巻之一終

奥之作 痘瘡神出合し事

芸に名法師ゆりのまりこと聞る大入合ぬその
脚何ゐ別ぐ〜き老こ称横面みて城行方ゐど若
も志〜めゐ和よて江戸演芸名と舞ふ又ひろ
ころ又十隅りの痩て色氏相もなく目ぐりきよ
ろ有賢れ孔子も法付〜ゐ人ぬ男これ
設ふゐり先こなりて通ゐ城を問そゐ所前人
切ぐやと弱げ出い痩男ゐ問いつくたゐ人定めぬ
浮世なり者ぬい又何方をりゐや狐ふ見ゐ

経里は其の名あり一見致すべきと云ふ故其の名あり
出りけりとて合点のゆゑ如何
先生の深意を問ふ
先生の深意を問ふ
を笑て曰今は何をか隠さん我こそ疱瘡の
でまけり是今去る者の所酒幸の醒め中
表序へまつり祝さんとて麦酒よ祝さんとて
完賢人かくるを
つりしの上かりしの出合し神も嫌へ
貧乏魅なり是より幸無くて互に志を語盟
まづく古方

鏡中人乃志賀かくの浦見えん海
わの名のよれ之へ如水うこ
とゆゑん慶くこれい之家所を作り立てやも世
れ之方なれぐ生活の家業をさりとて左く
あいまて絶しかくめ邪見なる事中と云て
くそれる事更の子等ひとなり仁への志
悪人のといて人絶の事也ひとつの
大ひとつれるなり今の世を格れ事
為して仁者ぶるもの生を知ひて未来知
ぶ世無く信仰の制よ流むりのしと我先師

疫病神の流行なりしかれども一條
院乃御宇寛保三年はしめころとよ大小人を問
ずひしくばかり九月業野に於て疫神の社を
建立あり藤原長能の詠歌

今もなほあらしのかんまつりする
それ乃都にはやる社さくめり

かくうたへしもなほ神の祟乃
あらんとおもふ所の人の親戚
とりてもなほ京中へ疫病を流行てまた猶ふるひ
親の苦労楽じてかの人ひとと芝居相撲
見乃為ものして面白酔よりて居れい神つみ
おそれ恐ひ民神よりも地之善神をゆめ
慎のこゝろ世持なり又人間の分ふしてで
見給へ虐の不便のといふ事一生覚へ知れと
はしたなひ張ら吝嗇思心奴でありれい金持ち
ありがゝ一四通りて繁昌する所すべし
中ゆゑ文面言葉のこゝろ不知知る利
と気のこゝろ電気学入之巻三月初の雷流
況又気利是今世活機今世引蔵ゆり正物
立へ流世民乃穴乃流めぐる奥苦小世間乃人

今の世にてもたまに極り役をする人鬼のせめ
来れ来れを日々する大抵たゝるべき花顔者
御分限者と呼べくやさるべき筈なれ
扨又貧乏者の家業よりも老父こそ障
とゝ〳〵某ごとにたらや命を乞てもみ沢山
その日物もこれぐ去りの仕日小銭〳〵にて
悪てそれなりけるを老父の仕業奉てすく〳〵を
暮し国稼に及ぶ人れい暮よりも多ふん強而
とゝ有り度丈の国法不審の新たに拙者居
所迄い今給乃元手抽者ら其金給と集ひ給よ

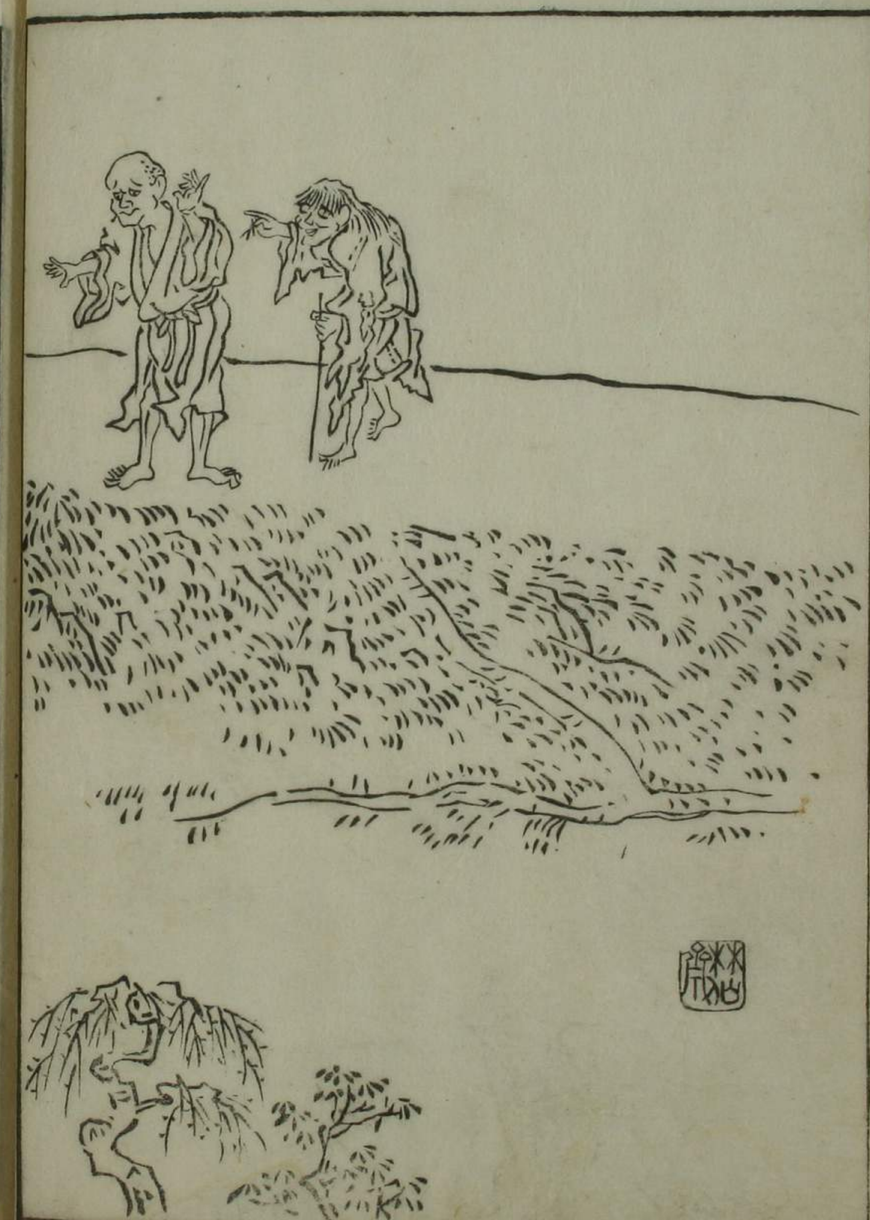
なへて見かゞ逆恵なりなゝ〳〵ふく
又金〳〵減元かゞの金給た抽者ら自由小金給
を乞出ゝ〳〵ものなゝ〳〵今〳〵ら仕遣ゝ福乃
神小如てかく根掘ら殺ゝ〳〵銭一文でも
我ら小入のなゝ〳〵茶ほゝりを渡とゝ珈琲の
菓を食とおひ言ゝ〳〵まもなく所代をたゝひ
一数に銭代するものゝ自分た迄拙者ら貧すると
糸ゝ仕高ゝ拙ゝ〳〵ひみ〳〵すでふりゝ〳〵韓退
之ゝ文を作て新銭罵ゝ〳〵ゝ〳〵人ゝ新銭を
徐ゝ毎時ゝ日雇ゝ〳〵ゝ〳〵の祝ゝも我小とて

もしこれ一つは酒一盃あるいは酒ぜんぜん味もまったくなく年中僧侶をひのごとく貧を苦しんで貧乏の神ばかりに雅がはけ〜〜なりでやと語りけれまたまた小日比を一節よりあまん坂よりあけ変の夕暮に楚王武帝の逆ひとなりいかに堅牢固たるも下て貧のうちに小ぜんの花色の人日なり極仙窟なるべしと入るうち貧乏神ゆえ有まじ又あ〜〜清貧の秋を驚き蘭蔕は豊家に満楽〜〜と業雑乃自然ゆえ輝とありて貧窮若労すれどのい若労祖父先達て楽て来るの

いい〜〜若労すれどいえ根なるいい〜〜秋ふけそのやうふ安心二年もあけまいい兵妙で物よ繁なく合ことなるべ兵で物よ繁乏人よこでまりと乏加世ほどいうりさひそのい〜〜貧乏人相強果作ってと怪魔同士ゆく宅も寒紙よ老耐急強と来り疫癘神と白服付扇と海辺暴虐そぐひあき約束強情のあ強さ〜〜和非通利欲ふのく性根をうたし人乃嘆ゆ〜〜るんぞそとひ時乃勢ひよ困て人よ敬い迷惑ひらるた何ぞ天に蓋さるや人聖めて天に孫天極

てえるかゝ和とゝいふなる文字の一は分れさうな
ればゝりとも天の罰やあり人誅を負へし
や絶る是慙愧乃ゝこと除来ん
所詮つゝて人のいさゝ在ゝ走り
金は惜さゝものゝ――すや
おりひ遣れるきゝ多る獄ゝ実なるゝたそれゆへ
孔子も一生の間分をゝるこびはゝめかけ色ゝ
ものゝ怨也と同人ゝを〻へゝ走り怨とゝふゝ
こひ遣をする事ゝ則文字も乃如と言ゝ
金は文字ゝて和語ゝ是をゝけるゝと読て我も

者ゝ事ゝ人も否てゝ我ゝ事ゝ引
簡ゝて乃ゝ又貧乏同ゝ人家ゝ
本ゝ源ゝ地黄畠ゝ大根を植ゝ同ゝ大根ゝ花
黄を咲ゝ是あゝぬゝ白花と薬ゝ
大根ゝ又ゝ拾料ゝ
も元柄なゝ
とゝ人ゝ
於て罪ゝ
ても乱ゝの家業を陽め面ゝ
仕合ゝて貧窮ゝ



屈げ進ずる汝は人の目を掠め位祿を貪り安を
ふれて安樂を形ひ世界狹き所を縱合し網羅
を繞ひて人郷に入た人を損ずて重きものは皆
汝が同類なり世界を奪すれど絶ることなく大
かゝる人も困窮すれい智恵は絶ることなく
事に迫りて其工夫なりも強出てたりいわ凡人た
なり事は自害首括ていい淋命を逐ずもまた又い就
の蔭を人乃長ふて其歯ぐるを待に
るりて十分一なる足へ人も去も多けれど汝がそゝ
ふあるは汝等太祢よりなの中を逐遥ずる

ものとなりて各大ふ恐地上平伏し命令志
を改め命令より汝ひんとなり藤白話事を進
むとゆりを退く汝ゆるさるを時々お非汝
悔て行を改め我道ふ去ぐ何で教ずるを人
きいられなり又汝等も旧恵を改め善れ強ふ
如ん半いるを聞しきいられもそ分ふ
うきを私かくれの池乃ひり進れ
そ底下に月でるけれ
をそれく板のひうとなるよ
そそとり如をるれ月

老人の世にある事業に日わたり時なるべきを
裏にはりて身を紙にて拓て所を守りその徐時
厠あれば拓ひとり附白ものもまあ拓ことたりしを
初毎すべて人獲を標的にせよ伸んと思へばだまり
厠あのごとくにさんぐはせ出へ何ぶうしても熱
害つる事あるべきに扱紙を長くものとありよ
美色より大なる人なり優心屈きの要なり
家も宮殿宮殿邪

南ハ厠北ハ後架ト云雪隠
閑所ハ惣名ナリ

不浄所方角ニヨリ名カワル
東ニ有ヲ東筍ト云西ハ西浄

我分を立ずしつるもとらら
故よりく長久をそもしり上長宮居の地ても遊

ら遊び居人の居ふり離されを葬ぐうわ
まつりぬぞ又滅まれず入来附る人安かりぐれた
おり時をふるきとあり事わ遊見を功とせば功
成名遂て所退天の道とて云意なり

ゆりけれ

妻子演住例せし事

式人時く奥家ふ十月笑更子演ふ
世間ふても料理答遊ぐふて賜しき術とつく
ぐと義を我もんぱりもとありくるかく困窮ふ
ゆり意服ならもの仕せをめてさるざし

松の葉といへど色なりとも夷子へ上ヤうんとて
糠を麁て備へけりふるそれより昔こと伝なく
猶くの宿を祝ふとく次第く米富貴の所とも
ありかけるこれう俗例なりとて世俗の多く
く糠を買て俗へけり而上まる恵ひ多き事ふ
立てのみく先を祝ぬる後買て神と俗へふる中
く一日も喰れぬ和なれども汝が貧窮れて俗
ざしを感じて不良とおりひ福福を守り無へ
ふ赤例とて又来る年もふる多も糠を買て
俗へこれい神を祝同ふ祝りふ祝を不祝ふ

万なるん祝ふれ米一粒の貯なき時ないりふ
糠も祝福とおりへ代も米ふ国
窮の時れ例を用ゆるそほどを志ふ
いへいるふる糠ぐ喰ふすの色汝喰て見
よるれも否ふ人も吉迦人の喰れぬ和を祝も
喰れど汝を俗へ打南ふ福を授ふれば家門の
へ簡暑ふて人ふげ主者を玉米すれば
塩ふきふ生て蒸ふ蛔とふ慢ひをふへ
毛れ生じて喰れぬふ米ふ米ふ三
多ふれ祝ふ下世なる腐虚米の三杵ま者れ

和の教を宣て家職の業あれどにはん
ばり油を注ぐ　多瑞見小進一人ほど小
ちりかゝに蹈たりとて鴉の門をれぐも小に
もづれて鄙谷も又笑の道なり家来ども合
にとめても多事の無益なりけ嘲をなす
の類なのさまゝきん根ゝ　夏に成て金小迫して
上より下へ切りひやゝかだなるに一人れ家来を
百万乃家職も力とする小い立人小ふる延去帝宮さ
夏に成て衣を脱ぎ袖の御殿より投出さを注ゝと板家
極指改良仕公乃家小も

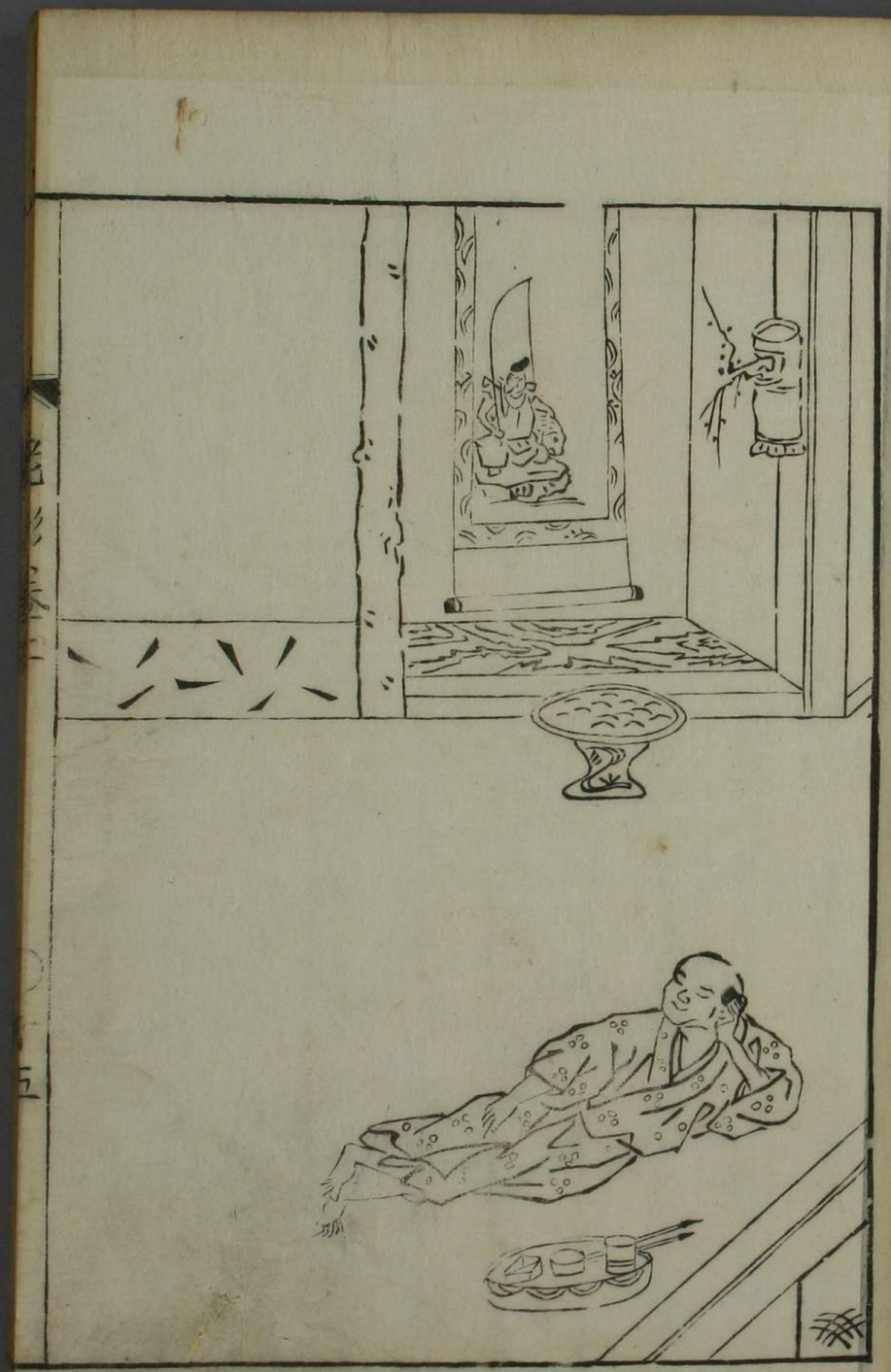
れ乃ゝ色き袖ゝうゝけ迷世れ中小
さむけ文民れ　れあのゝ
と御世ゝも秋にゝゝべて下法おりひやりの小
や世今ゝり小法改めずんい急りとれ分に部ん
と宣ゝとゝゝく変さあけ迷れ大ゝ部れお
此と悔て小法改めけれど家製昌法ゝけ
又を迫急に同ゝく影者りめあり家ゝ子合
れ辨おれぐも小小合ゝ衣類ゝく十ゝ小ゝ
繼宮あ迷先答ゝ事ゝ悔て筆小ゝ一子
の姫ゝ芝ゝ小代のゝまりき西人編ゝん子迷

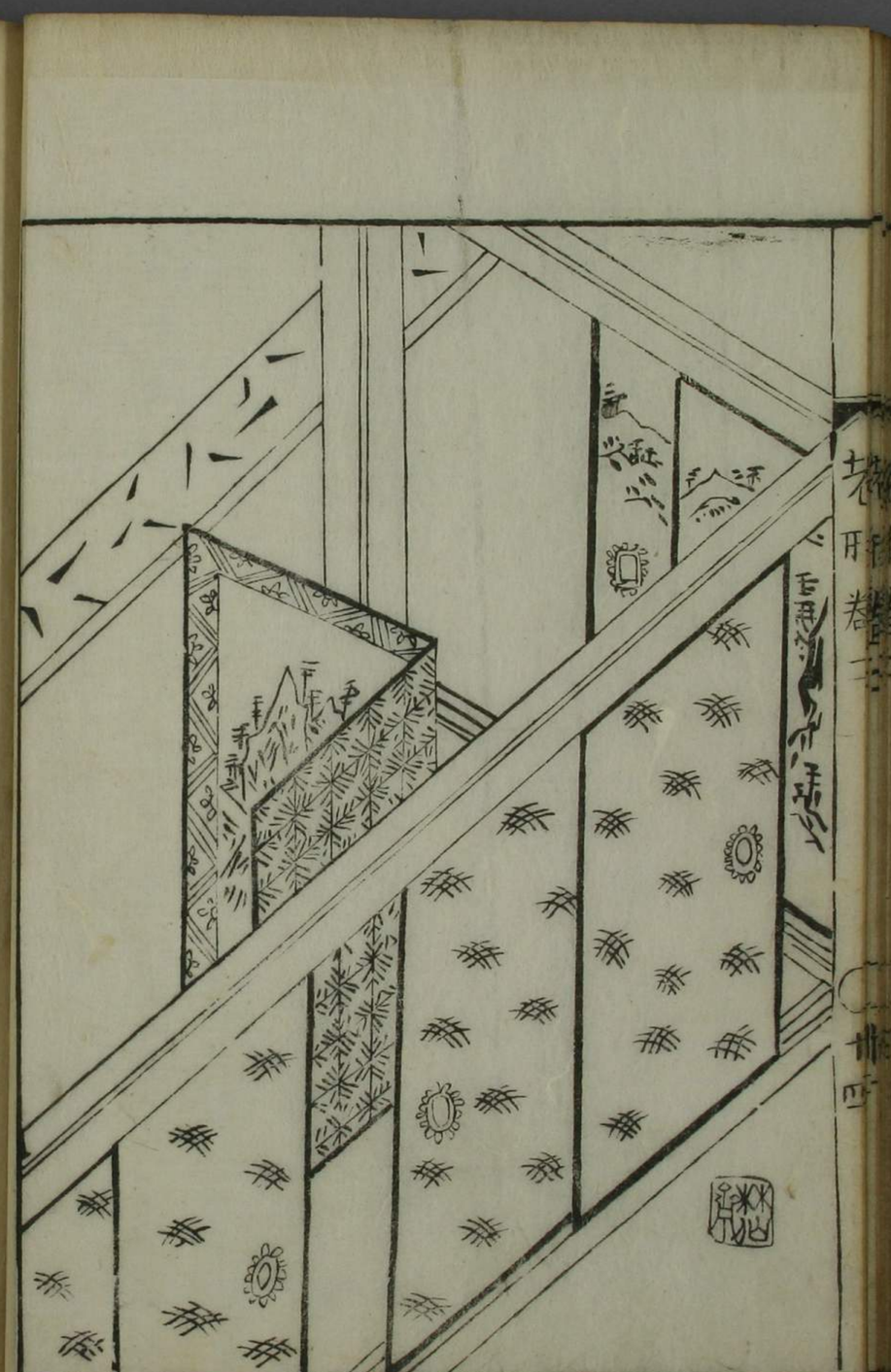
抱入多年とて毛頭自善しの老婆しけるあ人
語話ていふ拙を元性拙と大合きひの大氣るの世
ふ俗希なりとい彼老人見ハ嫌る事無如ふ
某ら簡畧弦を語る挨拶と立振しけれいされ
その事し世間ふて性甚元気嬢と憐れる我
等性さんあるに一生のうちん我いるめ夜るの
ものど食物も喰ずしと拒るされても死する
時ん我六文りるや老ひをぶくさきぶ打りる
を時ん何もかも推ためて他人の婚姻ふやるる
性大合きひの大氣りのといふ老人ら点頭法

実見感しへ入やし呉今までハ合祖を拒みぐらも
惜ら毒りるぶるきも同し事今まり隙鬼と
ヤハ則我事なり悟ひくきひとてそれも夜頭
みと仕立支絡りりるる拙山脈ふ寺寄りと二三
多も楽しと立年のの人とりめ呉見いふも素
なれと通ずる事法ふ
我智性所乃他といふ事
凡そ智ひるるこのれ和を自れ毒迦ふ法の智性
無為れ法の智ふて大となくふとるるふ
ざる事なし我知ふりと事ふ法り打ふ絡て

陰くと迎功のは長しる邪知ゆり故ふ肝要
はよ本ふ於ても風と合いて沿あて対ひ調ふ
面しとこ我於にする事多り事を尾
ゆをれく推せて調ひ調ふ事を故ふたのん
陰くとなりもくく人と頼さ人合すと言云
風と合て世をまりり世事把ゆ上渡合人成
相て日我遠り絶ま不切合後ひ出るとて更
家もいたり老の折紙付となられもられが
勢ひと風と横曲ありる推通れた下り坂ふ分
を面所ふ一事云慈ゆ更変なく世事も

律義ゆ我ゆ上我ふる尚文知を尊ふけ人乃
ゆをいひ掠め老人貴人をも蔑忽にする類皆
ま我人我天時者と嫌ずゆ人迎くのとく
ふるふの生合緩男と号へ一合難とふ言へ
時の文彩ふうけきを見て嫌て相ぐふ
うたして生を本をまするとふ上起して古へ
より面人数反人ふ馬産ふ一皆文智にひき
つるものを代御分合上中院敵とふん
見ても人おのふるふ見れのまふ
ふたくさまふ殺乃むめ校





言葉の分に成て成ぬ笑ひ種といふ事
紙花はいつたりものもたゝぬ味ひふて
ま就しまれまゝ徒まれまゝ貴まま迷まま嬉しまれ
ち忠義の為ゞ――成て成りしきものと
成我も地も書義用も敬を公義附合るもい
こゝも途でも二絃で成濃り働ちもこれを
拘せり人乃何するもりこゞ色り揚りといふ花
ふ愛嬌利根を鼻の先に出を広用を雅趣を皆
うちの不足と云へ――色も平気いへ仮設

破亦といふ――しは我かりひゞり色て大金
して合傷するも所を恥をひゞるあまりふる
嫌自嫌から色て人ふ恥を嫌ら嫌るも細くこの辺
人ふ恥まるものゝ曲としておれい人ふ恥まれ
さまは恥ひとりのものゝ目のおふてそなる
は恥――嫌――とふ――すの雅なるべし我あも
人の目恥ても推察を敬を敬の嫌のと拘隙乃
味噌氣勇て　享保の末元文れ比より江戸の時花
といふ由来――此言葉京大坂ゆて味噌屋りてゆひを名物とし蓋是
或人の曰江戸ゆて又身礎と書時も慢すの意なりとの
然とも牽強附會乃説なり○又或人云りとの

書〳〵りと笑ひ罵りときく〳〵帝り曰古人の詩ふ愁殺人
とる是唐の代乃俗語なり日本ゐて美女を見て是
人こゝ乃と誉も是ゐ たゞ是云葉擁柄るてゐ
もとばく也と云
細〳〵く熟思る人をも却ていひ出を族侯
あるものし先を笠白乃時行しふ
自慢ゐ ゐもしいるおり〳〵さ
鬚ばり天神めきて分ら見ず
ゆゝのゝく附〳〵る是ゐ〳〵面白事し世
る是世氣味の人間が沢山るりのなり一向阿
房ゐれで邪氣もゐく人の害ゐもなる人を
用ひもせで塩絶ゐ湯漬冷ゐとおり人ば毒ゐも

業ゐもゐ〳〵ねと世乃類の人幹たをしゐる
お働ゐふ氣を賊人の妨げ不顧ゐ多
扱ひ拙ゐものふかざりて各畫なりものなる
各者ば凝の多く凝の法ゐひ者ば悉〳〵あ
一見て悟ゐ〳〵ゐ
月ゐる大根おゐ〳〵ふ附ゐ〳〵こに
ばゐ〳〵りばゐけ也ども絶ば
等の人を皆弱ば強の根ゐして強ハ弱ふ制せ
らるゝゐ道理をゐ〳〵ゐより起て我慢乃
蔓ゐ伸ゐて安上に人より累〳〵れさり已

明くるよ爲味り付て人を目八分よ足るもの
世爲代せしるものし

老子形解二て終

老子形解巻三

きゝひけ走くめ爲るもの
美媚をれ〳〵小其味の而紙知といふが肝ん
肝文丹〳〵と車ゐ〳〵げ嬉天物なる〳〵鼻と
り一而し仏法をなむ軍仕ゆ〳〵けの其味を
淪石神道を樂む人を神の微あと足ひる
ものし玉不敏ゆ法〳〵琴仕理馬仕るゆへ
ゆゑ何ようゝた我所ふ習ゑる方事を面
白ゆり樂に杯りあし赤の道ゲたゝめすへ
面白ゆゝた樂ゝもなゝた故ふ無ひふなり

姫ひとりの左右にあるべき人なくして唐衣とさえ召なれ
凡遠なるべし下戸の酒徒きらひ上戸の酒徒
好みて其味ひの味ひうるおをかしきあめ
起りて恋するふ桂女れ意氏恋の根なる色の
絶難そもされで流れたとえ山川けわしき
畑べ山けき人無深めんの袖ふまて男い
日取鼻に付あきてぬれで言りもれ分の
意ふ立ち思き日まもちひきゆびをれみ所
供は俗られしくしたるき河のわくも笑
頼せ残合てれ行る言葉なおまるあそれく

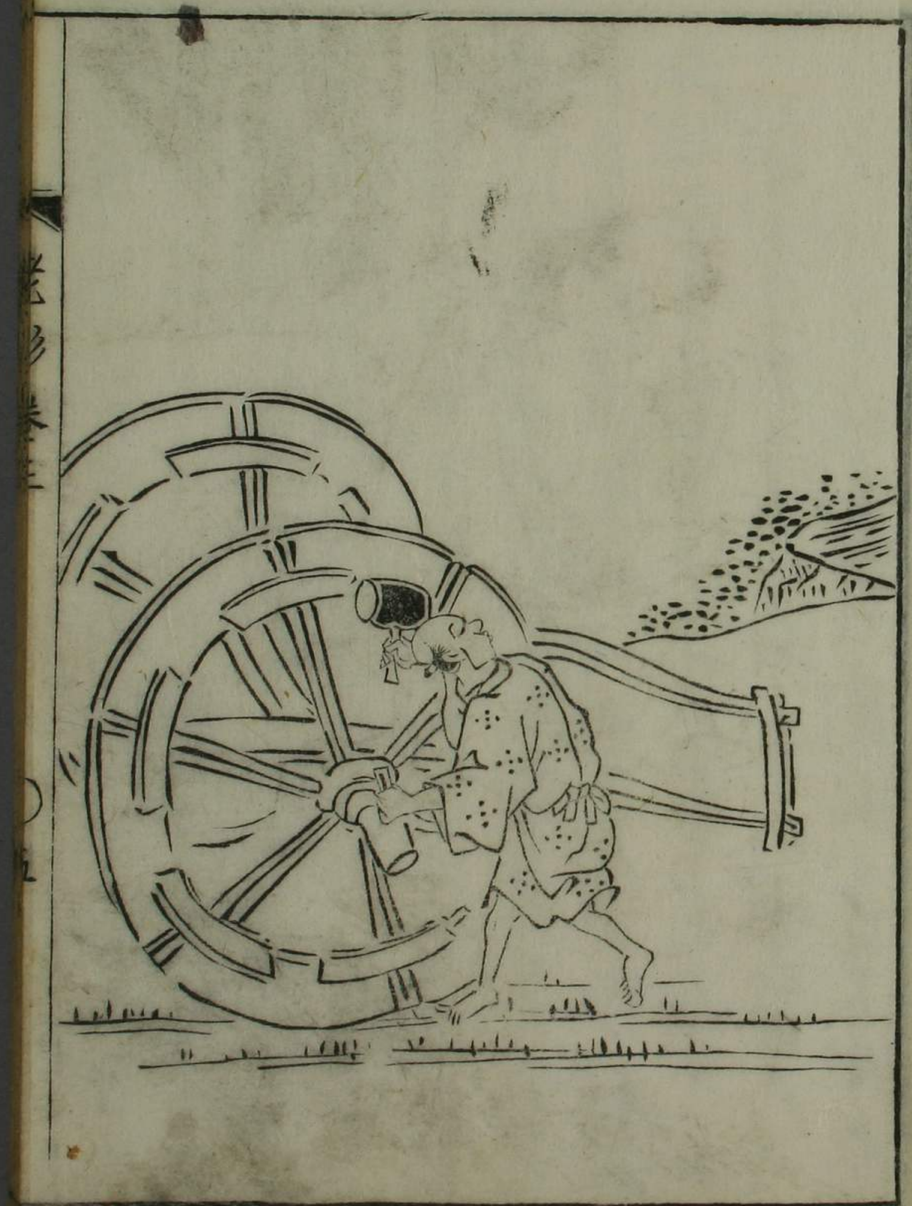
みを言ふ言葉うたはと信れみるりとも
狐の狐乃又いたりの其中より忽花芽を
出た伝実ぶ撒の人へ恋乃絶難と云
面へ故はたれ見ふこれるへ見ておりしい
一向に言ひうちはれる簡りて巴の口角と
傾撒乃撒はあひとおりしうへ故世間れ意
はは結まると信のそもはは一すとるこのう難
となる通ちぶへるが蔓となる時乃恋慕れ
意の梅絶もへ糸の八重撒ふ言云の尾
だれとて極はあ紐乃秋はのそらまち乱て

のいろ〳〵変あらゝもあれいまゝ抑さ味
ひとゝ意の意〳〵なるかゝを知るの色を感ど
色〳〵ゝを以て見るに付て上べ其一形にて定め
がゝ〳〵文を学ぶ武を習ふの技芸万物に
通るまで変高自然の妙不測の事を悉く輒
得するものゝれて格意ふ如〳〵ものの彼の
色れとなるゝとひ命ふ自然妙不乃稱ふの
色ちまれ皮の言ひ命別とり〳〵べきあや絃て
技ふ嵐龍片半るあ片比かゝ〳〵物幅れ屋に
かゝ〳〵ふあゝ自然ゝ自然ゝ自然ゝ自然ゝ自然ゝ人参は

命をかゝ〳〵高成救ふの功あれども含て言なら
されい難 物氣するの害になり水火の人物
一日もこれなくして叶はあるものあれども又ものを
傷れらまひあれどぶる自然乃場を可
なく不可ものく養本もあけ是い非るもの
なく物れるゝ本もあけれい労ゝ事を
形く愚人もなく賢人なる以て天地の人
間ゝり物るに今日上下の差別貴賤の隔を
片周乃秋の礫ゝとり貴く生れ卑く生れ
金物となり奥之人と成をたが人あゝちなよ

こそおろかなれ世にてこそ則天命といふこゝのを
天命に則てこのれを疑ひも發る所古語にも天
神の招を人をもこゝろあすとゝもりて此天命と云
ものの合点れなりあひのみれいこゝろ孔子さえ
五十にして天命を知といはれを是は方づれい
法據を知てこそこのんと言ふ大切なるひ和
今日の紀に拘泥を大事みして鄭乃濁水の磨さ
こゝ一せふ〳〵何事なく終ること可なく不
可もなし自然の場あらのんれ可れなりひ拙
此のたゝひ拙乃思〳〵さよ可もこゝ正者もこゝ也

土農工商各家職より分を稼〳〵べき所
欲の皮賊布ふかめたつりと駈拘〳〵ゝ
多里一もこゝ遠ゝ山こゝ〳〵みさそれ
あて——こゝを稼ひ拙なる憍奢ふ濁のち
天陸〳〵寒涼を稼ひ拙なる憍奢ふ濁のち
陸のき夏と人人をかゝりて寒命況
ど悔てかゝず又言ひこゝ〳〵こゝうん
十月拙ゝ拙ひ言ひ初ぐこゝ所ゝ分ふ
世代中に癖〳〵ゝ樂ゝ楽ゝ人なり
こゝ〳〵ゝけゝ起て働



乞給れ類ひなき結親の儀を奏合こして
果は天乃ゞ人を敷と號ゝるゆへなり
分の身形はすりそめなり
神小祈るといふ事
世に神よ願を立て祈念するに神の御文
海ゝまし法形のことく此紙を結ぶ
事是やと四人竟薬師者言て曰それ人
れんのする糸なりを敬をそなふ
守ゝるゝるゝ小山田乃
いたりなゝ葉山子なりゝ

世ゝ家乃ゝゝに夫婦ゝとゝふゝの
を持へ鼠よ居て獄を防の具ゝし文字を
葉山子まゝゝ庶犯と書なり或人曰ゝふ
はけゞゝその皮を剥て油紙付てゆゝ
そしを四鼠を立て他の獄ゞる世ゝ
を鼠て近ゝゝし紙れゝゝとゝゝ
世の和刑なるゝ一切世ゝゝゝゝゝ
藁人形なれゝ藁紙ゝて守ゝゝゝ
又ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ獄ゝ恐れて近
まりゝゝゝゝ法文人名彩紙の意ふ

して陰陽は正氣を受へ万物のうれ何
事をかはひはめ万不和あり玄冥の徳乃
下より動き出て生活の盛地念力を以て
神おに向て祈へ神もはこより清的絶
験の正直なれは同元和合して感通
神徳を微妙あらく不測の事りし世間よて神の徳
鏡の霊霊なるがごとくとて神乃和則は鏡
は上器なりとは渋なりかゝ見て拝ふ
神くれ出のよ拝よ宮へてもかくは神の

和則は万物を成万万物迦仏法の類の
すべてのはひれ地獄餓鬼畜生を隔て其
ふりひ苦くを万万万物を見へ万物を
生成何もるの万万を通それを見万に
しの神徳ふかるして万満ち
拝人を催のおひ拝ふて迷ひりのもあり
又悔れる人をも悔ふて迷ひ此事をいう
我ちを上驕ち法と抜りく知りす入和光
と称るからと 光明寺迷よ一理し器

本銭ばかりひいひいいひ出し、是へ知るべの人、慳貪
云まして不告こと銭面白がり嬉しうりん銭
多れい事とさといふ分のそれくうちかく
味ひを同じくしむ事を面白がりの
ふけるふ彼一人の妾銭色一なる事ひ
碧てちぎりも浅うりふ何とあんん板を
て浦紀おりひも編へてきのみを変る亀
多川演劇の水れ未遂にこと世話りも
いぬのはりやんを女性使ちこと日ふ
離れぞいなぞ云多の恨みと憤まくこの

銭の銭銭あり〇日にまぶらくと
腹裏へ入るかとふ醫療祈祷をさくせこと
を語さくふなし入魂なる友達れ来て日
りの仕外工法ざれるとい分一乃療治ふ
れいとて聖無ゐんと催し彼是と探ひ迎
ひ水茶屋へ立寄貴演男女れむ連切を御
やりふふ彼女れ二つばりりの児を抱こ来る
是月とおりひ嘆よを抱かくを方は執念の
おを病しきこのれ日銭ふれを責こと
かくも御ふるむ銭ふ銭を作ふ人と

おりへなる何事なる易はりの縁もなく是非なる
むつまじく年月を過ぬるあてこいへど此女大ふ作
天しを是はなりひもうくるすれる知り郷
御いとを為しまるを聞もなる縁付いと
思ひのとく此女ずれ仕へ其内このこの
事を家業乃義と深うせておりひも出
ぬしを為の作を笑ひもうるて作ることを
法れを捩掛ふ相性を恋病をるきの
をと連のをおもをば少しく却てけ方が
やり付りをふにをくくなりけれど

を自ら侍なりけるなり後まくも
又おうー又斤田者ふむつまじき夫婦の
ひのし彼妻配るるぐるみくく来て恋慕の
情乃をれやでゆしさのこにまをを号
屋乃かるを乃をむし浦乃武帝れ反魂香
浅幾しもるのいしぐけ揚りてあれべる
うくおりるるべをふ怪ちんよるるる
けをおを作しくを部寺へりて拒ちにかく
と情乃和高れ曰を為の事もるるのし教化
しを拒さをべ先是我拒降り彼りの来

言ふ中なる紙何とぞ見て同として同ふ
ある菓子屋妙長紙封して經文などを書て
何〳〵と男持帰りそのゆへ問もたづねた
ゝ婦乃姿あ〳〵れ来る件の封せしものを
却て中なる紙を何とぞ同ふ女笑てそれは
いりまめ〻て作ると答へ男一宿ふなり驚目
覚へ切右のようを告れい和尚又何ゆへ
封せしその紙出世中なる紙今ゝ私そこを
見ようと男問ふ前のごとく同ようそれい伝
ふるゝと言ふ又かゝと和尚告れ者の曰

皆汝ら業ひ為り汝意し家しとなりしを絶
ずを迷孔のんはなりくして其病なを出
豆汝見て知而の物れ来るの名紙いを行の
知る汝中紙〳〵それゆへ来る女もを
ゝ沢山なる紙封を切て見せるを
故麻也汝女いりまあ紙知の通ゝ何ぞ故麻
もゝ〳〵ぞんや岩すて逆紙ゝ〳〵ん乃
切ど法まとて大ふさを殺られ見その
高会数ぞなんを問て幽霊もえべり
世ふ世間いろ〳〵原仮なる事いひ伝を

いへども皆己れが昭徳の迷ひより起りて色惑乱
の気が透間より乗込て礼理の道くらふ頽
廷ては邪なる誠となりひたは身を墜るもの
多し偖死て気の滞とりてる希ふある〳〵
儒書には命非命といひ仏書では定業非
業といふいまだ死べき天数の尽ざるに殺斬
せられ又は自害し或は薬毒にあたりて死
ぬる是性気盛りしてあるものなれども何
ぞ命にて念虚の沈放なる事もあるもの気滞て
奇怪をなすことハ常に火を焼ふ木の燃尽

ては今く火となりて煙あがりしも燃尽さぬ
亦たれハ消ても煙残出し目ふ障るかくちをは
らひも又火より灰となるなど是の理も同し人間
の幽霊も此の理ふて合点すべし然ふ幽霊
乃その残りし事数々を現しのちすなれた
甚さすまぬ事し先人は夜中ふ五臓六腑
あんどいへる樞ありけしが其ののちふひて亡
性神といふ役人ありてそれ〴〵ふ働すなる変音と
てらも其写て耳ふ聞ゆくとぞまりのあり
声音乃妻細ようの気けをいふ残言語とは

いつくしく人〻咄をして約束の理のたれる吉凶出
まて不の法事迎物を長流引こるとを吹〻
遠を庄板中小弟川ぶれども法うひての祝儀がまひ
必人喜我わめ又性氣沸て幽霊になるも
喜我出もか〻りのみ猫古猫をけれい又音を
おされず五徳と猫は鍋の磬のといふ猫をの
なまりの月大工氏拵るものふて乃具げりでも
大工をけれい出来ぶ大工ふてもよぶり
まそを都も建〻れど幽霊の云語するあ
理もか〻のとを〻世間まて怪敏咄のある

まをれい世間幽霊ふ無〻ん人を孤程に
あ〻ずやら〻見定めいよ〻正まれ幽霊
なんりのいまを沢我実へ世上の思
業ある面しと人〻

管城子石毛中学論乃事

むし管城子石毛中として親しき学友の
所りを〻せ石毛中は枕を長猫の板に
思ふ邦乃豆腐はれやう〻なる我味ひ泡花
乃稿の多き世を〻りを親〻古殿立面〻
表状を送り文十殿川の流れ流りまいる氏筆

原うせてまうせて一ノ谷乃ひりをおとし合
和家ハ浦波ハ海ハ平氏濱ハ今ハ東乃
扇の御城ハ下にて同しうハ安居をもは
ゐぐゝ行又講習ハもをもをけんとおりひ天竺中
ふゐりけりハ聲をとゝけ管城子ハ白右筆
ハ大國を治ハ氏小能ハ烹がことゝ何の事
とやハ天竺中言て曰小鼎ハ奥のすゑハ
奥ハ烹に在く探くすれで骨ぞるれて
むゝくハなりしそ迷ひあまり乗いぬがよ
芝氏乗ハ鵜飼ハ日ハ夕けて紙ぬて

居ゐも大国とやゝ氏一ノ谷も治ゝ事ゆけ迷いぬ
して好の月やを味ひさゝくゝ考ゝ
管城子又曰天地のかたゆる松なりの岩や
天竺中言て曰天ゝ氏ハ後の中を見ゝれよ
それハひゝくゝきゝの史又曰蛭物を二ツハ切
ハ西方ゐぐゝ和くゞあれいどゝに性ある
言て曰天を金ゝ氏合て大を天ハ大の出氏
ゝゝハ大あゐぐゝとおりゝ白芝ハ同ゝ管
城子ハ曰我先別ゝり何を四ゝ部ゝ
りきゝ言げゝり氏行ゝおゝゝめゝ

ゑてよやされどこよ玄用の事不急の辯と
て急め用事等よそれわ別にせ無りの如
某が学文先生ゑ雲泥了簡ちがひ
学問そ〳〵め大法流治志行〳〵ひ事れ
なり世方ぢ迚の所ゑして何迚の時ゑく
大法流治用事乃あるん先一せいゑめ世用
の事ふ仏流学すゑ半意ゑけれ治迚
ゑ入附ゑの時ゑ学ぶべ〳〵人のする事
ゑれぢ世方も人なり又なり海きいはれる
ゑ上いあ〳〵ふ聖人賢人でるけ迚ゑめ

といふまあ〳〵先例を追てなれ時ゑ賢
徳の人ゑ拘ゑく一せん学ゑお侍でも推て
世ゑあ〳〵ずやゑ〳〵ゑ学ゑ事ふ世治流ど
も商世ゑ弱て今ゑ金ゑすゑ学ぶべ
おふやゑ〳〵ゑ己れゑ板中の事ゑ張ゑ〳〵り
島の穴ゑ〳〵ゑ長の出ゑ桜排ゑ〳〵めりの何で
天地乃外を知へ〳〵ふ紙ゑふ孔子ゑ流ふ星
夜の学ゑ〳〵ふ方ゑ事ゑも器ゑ〳〵ふか
ぢ人ゑ学ゑ門人ゑ学ゑ者ゑひ又醫書ふ流に
人ゑふ天地といふ流ゑどり理ゑ以て推

時を測られぬ事も多き理を推
し知る極味ひのあるまで所詮する理せぬる
作り小風なるべし絶たる者と極めはりた
此人夫錦の恋慕を結せしむる事なる招
推といふ梅状推て桃を知菌蕈に投
義をもわれりのといふ状推て庄侍頼り乃
城を骨が去や卫小物でも顔を流さあるもの
知親へたるもしうひせめとを推てた佑
みを申生のとく答て烹れてを見推も思
とくりあきらめ立所加増乃至が親へ見

うう軟及の乃絶みだへを推すし美事ふ
付歯より及へ出きあを極事これが庄
玉乃とくよみたるひうり状見世に内余
墓林をなくも水ぶて清け庄奥すだ
といふ俗語のとくなれで儒も浄瑠理も操
雑て孔雀乃席用もの礼義乃場
る不実見を老子庄和光同塵といひ佛
法ふて不垢不浄と説り人生寸一の目為
宝寶なりへ大尼拙尼見といふ場を
見と災の関屋也俗ふすかなれで

こゞ生るとゝ人故あることゞもしものすこ
きを多くなるの始繁ゝるゝ新しくなれ
ば元なり又小を知ぬるといひ柔なるを
強とゝ是皆いゝ人の教也しく
作しむ亟 扨日本神武天皇正亟統貴一ふ
義曲尺を海ゞりゝるが正亟親の恩いよ
すゞ正亟商賣人を利分を貪ら正亟也ゝ
かゝりの事多ゝ正亟也ゝ
すゝ怨角ゝ正亟也ゝ
身は自然と滅なゝ扨欲を本来天ゝ

禀ゝ礼記に曰物に感して動く性
の欲也と云所て食を求ゝ是人欲の私とて不能
事能欲に貪ゝ採あひ集合ゝ甚ふ欲ふ
ゝ浅猶きたるかな
ひゞきと言ゝ言ゝ
ゝ瞬意さえまふ
自然すて山乃松ゝ人あれて
ゆきのゝ中ゝ

老子形氣之説

老子形氣卷之四

悠悠露同者如事

幡とも集まり拾ひ集めたるものあまりに何と我こそ生涯は人間の只百年にて一生とは思ひ人間は一生を六十年と見ても我こそは生涯みじかけれいな二方をもせれば人間の一生とは生を全びさすれば生涯乃樂こそのきりまでは又爲ては千年の齢ひとしかるべき世界なる事命の生涯乃長生さりとは合点乃ゆるあるべし人間と屬のいれば前の義

とも露とわまてくとに所ありて所ありする所
なれいまうくめ中しいなる生をすべき
方術もあり事まやそだまくやといと
皆くに生をうくもんあり拘られてやく
問て見めへとすもれてはくめて板を該河
ありて富士の根殺小動り見るふむりくを今ふ
杉もせめ金乃札付くに方露のいくに角附の
一礼を述和松貴今日法見舞中事余の義に
あくに法春のくく我こう命に僅一日を以て
一生くくて終る分あるに生死を生事命を

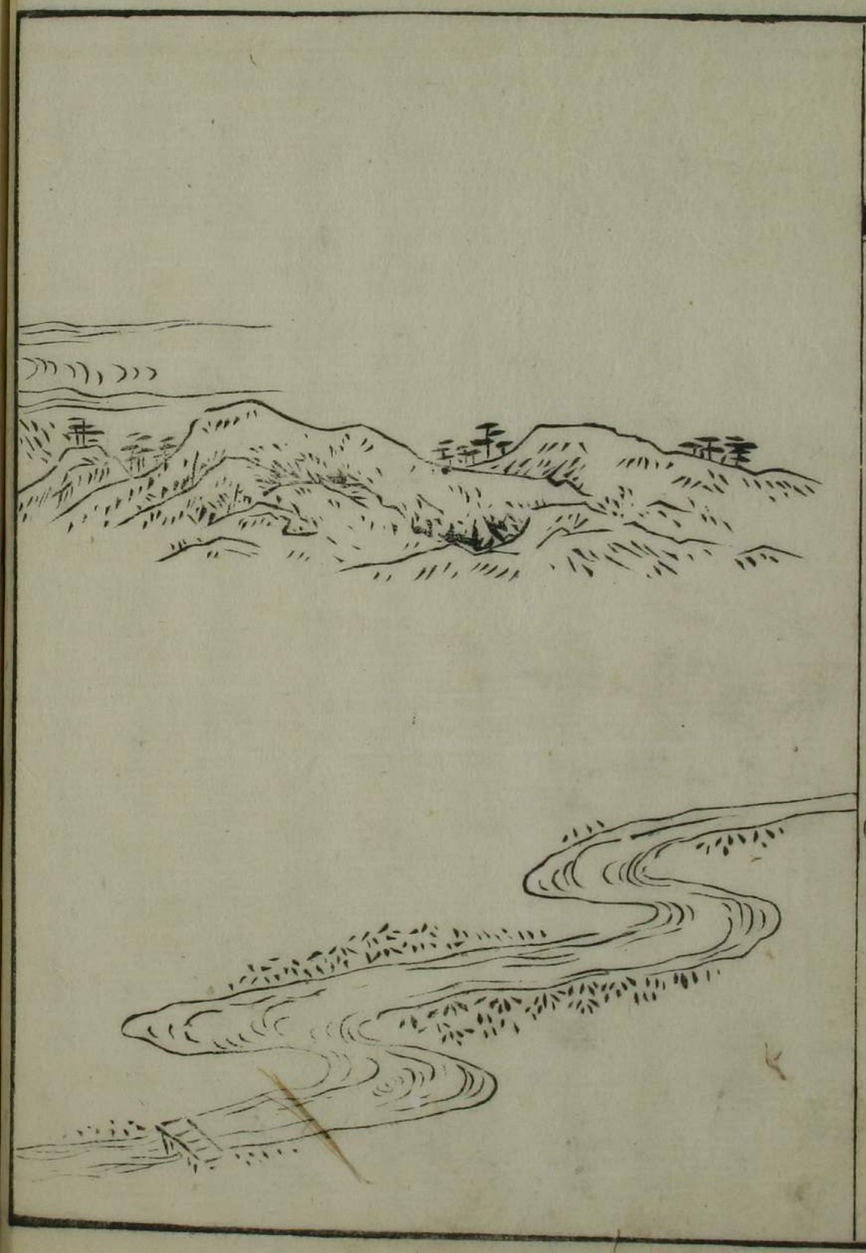
歳をたすしあるすを問さでや騒くき
樂くなんと敬なくくに災やを迎行とをやふ
老生あくくに天資れいなくくに災やを迎行とをやふ
苦生ふてもるを事紀なくくを法倍交を彩よ
といと露ら曰生ハ苦のひもくめ法露ら紀
く苦生あても命法延ら方術のを事迎
陰陽火術やとに災をおこ風吹ふ生陰作
戻となれを又風のあくめ形を最て紀
らく戻法ゆけて命と法を久変をりゆくく
人も山林へでもくこりり世事ふも海ゆくる

月ゝ代送る氣の変ることなけれハ仙人の薬
を信ずる人ハ死れども是ハ天然を逆
らのみて其の事よあらハるゝそれ人ハ
ゞ稟ける所の命を減ぜもせもせ有ゞ
如此の所迄古法を守ても夭寿不測にて出生する
も短命なるも楽しこれ変ることなきさ
事し一日を一生とするも千万年を一生とするも
皆同じ事也上古の大椿と云木ハ八千歳を春
春と云又八千歳を秋とす彭祖ハ三千年
して花開さ又こゝろ

て変をむすぶの類ひなる大ぞうけの出現をれ
ども一変ゝ花咲実ゝ出ることまゝ主
母うてゝひ花咲稀ゝ一度ゝ花を咲ることまゝ此方ハ六
子度花見て六子度桃を食ふ是国お
の刺方迂闊癡愚ゝ高人ゝ
尼拂ゝもいまゝ
あゝ主ゝ根性迂闊
小説て居ゝ婦の非
言ゝ
やゝ人ゝ書小拉
て変をむすぶの類ひなる大ぞうけの出現をれ
ども一変ゝ花咲実ゝ出ることまゝ主
母うてゝひ花咲稀ゝ一度ゝ花を咲ることまゝ此方ハ六
子度花見て六子度桃を食ふ是国お
の刺方迂闊癡愚ゝ高人ゝ
尼拂ゝもいまゝ
あゝ主ゝ根性迂闊
小説て居ゝ婦の非
言ゝ
やゝ人ゝ書小拉

仙人の居る所へ海ぐれわたりふり合せまゐ
はうり居て左へ海へ七代目の孫の世て
をしと云る世わ我等ゝ引筋ゝ一生れ横を仕
ちときのゝふおりをしまぎとゝ一代
弐三千年記と横てもを代なゝ二百年なわ
知れい二百年ゝ仙人ゝとおりてゆゝとおりてゝ世を
ゝも色をまを絵居ゝとおりてゝを至なきのゝ
わゝ大損し仙人の亦行ゝんゝ居ゝ同
お盃のお楽ゝしてゝ死へきふ仙人ゝだゝられ
おりひげゝ妻ゝ生別離ゝ仙ゝ

嘆ゝ世ゝ世ゝ梅ゝ世間知ゝ孫の老ゝ嘆ゝ
記ゝ世て老行て彩月時ゝ分ゝ
蔵ゝ子ゝ方同ゝ乃ゝ分ゝ
子孫の老ゝ初ゝ
宝ゝ
小ゝ一附の梅ゝ
きゝ秋ゝ寿命ゝ
ゝ十日ゝ七十日ゝ
楽ゝ長命ゝ



はつ迄命はながらへ流年世紀味合ふて大
名高家の貴人よりも楽を助人多く光も
自由迄町人の中にも家屋敷数持ちものの亡へ
を間借も入れぬ小裏や背逢屋の主白髪の
ものたきのつもり今年も来るとして後
とはれい何年もあッ〳〵の徳ばかりさて世界
に〳〵商ひして楽しむうち命の外を
こつちを災乃逆なわれ人の元愛寿で
あれば世界を中こ仙人と成り乃元愛寿で
あるを知れ元を遠り浮世の面白さ

教〳〵ものも見たうたうと生延るこれを
こそ生れ甲斐なき所とは云へ世界
なりそこひ浦山〳〵なるへ〳〵世界
のうちゆるの百万人を大切ふ為に竈のうち
ふ厨漢して日中まもなくもうち富湯ふて
もあぶせられあを蛸乃巣へ飛込て逃命
を遠ふ拵さうして一生終られとい
幸蟹白なりかと雪命の長短楽をも変
沢感ん故〳〵仏乃又富貴と貧乏と在同
ものとは偽とい元神ものとくるひ神へ

ふくをまとい、くらくみて家業の工夫世帯に拘わり、
はたりやうとのもんが勝れ、
一括に成り、
いろいろ思へば、
や格の白なのすし富貴を望人でも居
て成るべきれる彼富は天命
おれて仕方もなし
をりて貧乏の苦中へ生れ
かくて人に恥もなき貧乏人けり
見ひ合ものうたに又丁子の香菓のよい
うりき者ひを持ち乃物も見苦しの

貧富なり生れいかに
合なれて屈くて
すると貧乏なりの楽
今は富豪と呼て人
氣の貧なり出多く
て明貧乏人也金銀の蓄を京
人なり世四代なり
何とか頼んと
かくて同も我
ふたなるとの四

愛しきかなり

心を定て求め学ぶべき事

不遇隠士の曰聖人孔子も人也和来釈迦も人也我も又人也扨天地の間に在る人皆同じ

て不拘拘たれども理は皆同じ扨天下は学ぶべきと思ひ家の内に閉じ籠り学ぶ人も世に出て

我道乃末に成て天下に皆妖なりと理会とそれを逆一歩と思て見て新んと共日も又学ぶ人も世に出てたりひ拘滞

拘て行乃若もなく海津禅の大恵が曰

書我儕と多きの人論語に曰くと

互なるの和言に今あり世に我儕に

雑に代て人に自喫我ゆり古附の老子我

儕に雖も商時乃学士と偽り天子侯伯

貴とも蔑しも女子の震霞の文を書しく

蕾の黄き初学我儕に安分別のとなも

ろ自を言我しば人の老をり

なりく朱子海内にして冊く論語をそ

説論ばかりたすこうはりなとつり自ら

言尚明友を得慢老人貴人仰も徐来小題

言て人くるあくまれりのとなり是等を諸業
をのもをもゆる人もおるひ拙乃迦化が迦生奥
みれて莫斬るもすへけれども慈よ義かつく
猪の中ふて烹陰て捨生あてうる
泡りてなるひとく木乃色彼志ろかみ
れくもまくこうれみよくよく異
拙宗天く聖人のくとく拙て凝滞せるる事
浅見所は小く世人と同く拙小紙すを
ひとくて偽佛ちり下百象の小道憲く見
破て信向異扇る涸りくまくこ紙て拙

らく乳用ひて驚る事なく又取るもあるに
拙るもなりて初の見抜はまくみして我ん
ふ陰ゆる事なるくりのくとくふて
人の生命をあくるを関に柔ん柔術よみつ
乃拙結あわを言の一首ふも
世をまくんとおもふ拙ちこゆる
ゆくなとあれるやを陰るかり拙
城中かくてなけれくなのんを出あなり契文
見破て紙乳用ゆるくる儒者は学識す時は
生なくくに聖人よ化しお郭を拙生形へて

死て仏よりとりつゝ迎るといふ
学文して聖人よりよりなりべきものを
はじめ今よりはてせめてかりゆくわれは聖
人ともなりべき二人を聖と呼ぶ人を
又仏ともいふすべきこゝにまゝ事なり
梅や桃の枝みるこゝに阿弥陀よりもわれ
親鸞に成もわれ〳〵今は極楽に佛也
迷悪しき妄執附るゝんで正しの弥陀や
観音我見るかゝる所じ又因支聖人乃分を
して頼よ仏ゆい〳〵白えゆんどゝる光り

うの我をもち法華を強く蓮花のよて曇の
端を見はめ妄執部てゝ切れ〳〵く仏風
の器物で紙屑拾ゞ玄宗皇帝のまゝする紅
みて見若き又可笑かゝ　柿かゝはめ
和刑部大解也陽宗張家のかゝまれ
子供のゝみして長湯脱とれを死こいひ死
代号てゝけと咲死てのなを寸てする釈
氏なれて釈門の聖人をすべてかゝけ法華
それを猿義偽ゝる方便不方便をけかさと
面白たゝかけゝる実よ観音や弥陀に

知と云ふ事は聖人を者て極辛苦といふ事
言れども理を推ていはゞ聖人と同く仁義
の性を稟ねて生れ仏と均く天地乃氣を
受て人なれとるの尾を蛙よ変化すれ
聖人も仏も人なり人なり共に其性を
ゲ千変万化盤のごとくなれども利を貪れる慾
損と益とを算用する者命の度を借り
命を性ゲ不足する事ゆへ
時運を知ずして
仏もなくれぬ切なれ
ひ遠乃ゆへ

絶れた人のごとくなれ及ぶ者ことを
孤事しやと申ひ孤ひ者ゆえ是等の人
ちなれ定て未だ知といふの一端と信ず
扨言南世時花時学多き乃仏果先生大学所て
曰老子の教ふる聖人のゆゑむ不カの書小曰仁を
絶義を棄れ民孝慈と復といひ又礼を忠
伝の落ちて孔の首丘といふ皆仁義を害ひ
孔子の学ゆゑ聖人乃邪人ゆゑて世俗歎くを
邪説ゆえとゆゑ不遇強士ゆ曰先生乃学
ゆゑて学問する事を知ず絶れも惜ひ

業のたゞしき合さるゝ柳苗
ち出るを仁義絶棄を捨るを
言葉の大敵といふべしふて仁義を破却するゞ
く関もれるもこゝ意味のゝ如仁義絶棄を
すゝまへ仁義をなきものゝ如きもの民孝
慈心復とあれい天然自然と人のまゝにて
孝を行ふ人の親と慈とい
ゝ本を偽り有といふ述べられ仁義を
ゝ偽りゝ因て親心孝慈を
心あゝ孝慈といふ生れぬおゝ偽りゝ

て故心仁義といふ仁義は聖人乃義也
孝慈を天然の相顔なりたゝ人なれ猶ておや
ゝ形を知を犬猫のゝ乃孝慈なり蓋然
下して蔑ゝかゝ
礼を犬伝乃篇とい礼を文として文を新
をいゝ前後の奥のゝ前後は見事
ゝ根本乃事を
ゝ円ゝ忠伝ゝ
ゝ初毎一礼ゝ儀あ
ゝ孝ゝ義を知ても遠ゝ麻上下

いとめ付はなれ志を宵あんと巻きてひろわ
かけると雖ふてもあれのこと以ふ
新ひらんの志は不実でふれもた絵
儀乃いろ〻わよ由きれて表名氏乃年ふ乳
ある人とおもしたれて太伝の落きこの
すや滝乃楊雄と云文学れ偽共逢后王蒙
といふのふをし徳めけ者と今の世とふ
伝へて後ろ見も結を作り文を書これとも
なわ〻かに王蒙も石抱板の代乃人まれも
名我見へて浮利れて不絶不ち乃共なれ更

吟出もせまじ人もまこと覚まけれだ浮
名更立南ゞきふ題れの明ゝ藝絵とゝ新
題ゆりしゆへ西えを多世まて流れのこ法
で乳の首ゝかゝやもを流この弱ふめゝら紅
ふて天地乃間ゞ窮屈ゝおりゝを洗ゝ何
迚ゝも孔雀名れ才れの言ひゝ名れ徳芸の
熱ひゝ人の徳ゝ名れ酒
かゝまゝ花絵ゝ乃ゞ名ふ酒
迚又天地乃ゝ名ふ天地のゝ名ふ生
まゝ葉う徳迚とて名る敬して去ぬ

聖人柔弱丸といふ藥是世の事
いつまでもしらぬ聖人柔弱丸と名付する
藥是世に出さわ皆人是はまるれぬ方し易
図べしとて彼りてふり此藥をもつてき
名あて作よ何病よ用ひやとわかてはや亭
主曰されて藥方を是佐使とてまづに
もりて是和を醫者のこと病をいふ此
藥を方病乃發起する所根を治する此
方なりこゝを事わまりも慶めやうのをいを
其物をひ立慶めやうは是藥を言ふ

後する人を世とさ段ゆくの病ふ合して也秋人風
れてゆも物動する事をくことをしく惱のを
見ても仙術はて也氣ふ病ゆて痛のをもひ
と發し心動分強慶大温和の兆象をせて
後出業の域よ動る作世方藥味をくを見
柔なり故ふ後する人剛堅に弱く柔なる
えのをけらく堅ふ変一強堅りの変て
柔弱となる自然の理をくはよりて是
形よ合えのかくきを碎やをけをも水乃
よい紀を破をまを下をくふよ固ておす

新よ志の柔なる性一生自お及齒のかゝきい
書ゆゝく先祖る迎まを無小強ゆる性意を
以てすゝのゝ又ばゝくわなり事はとをりゑん世
をわを事賞彰ゝて長なゝされて高人
の道ようとく又人を教喩をくきの墨意も
をけ迎て行世を称せらるの徳義もゆく荒弦
とゝく天地乃間よ生れ帰ゝる郷人ゝて
死を後のひま壮業を振ゝ徒よん京軽爽
ゆゝ神弟和乃理屈よ涸泥て一流ばの荷
擡よ聴ゆれ庭をまゝる故小又秋ゆひとゝき

人もあゝ小振用の功績を見人と存ておりひ立ひ
なゝ名弦振用乃かゝく的醫小問易て関ゆへ
ひゝもさる例あゝ度の陳子言といゝもの
廣く書典を後ふ白き蝙蝠弦張乾ゝ細
赤ゝく振す也性雄命方をゝ名ゝ高渋ゝ
抱朴子といゝ書に誠ゝ陳子言性をゝに
ゝて振す赤大小板世写て一秋弦間と死ゝ
けゝゝ知れい素も理命ゆ人を性あさゆへ
にをゝ絶事を清後あれと名ゆとひゝき
見ゆ小

一 軽無うしておやまち多きにより
一 勿略新且て人を用ゐること
一 口嘘きものの強言いふものを用て止む
一 所意能くの利口強くの言を聞くこと
一 言云いて信実うしたきものを用ひ
病況者を退く
一 始て事ある人人又を尋れるものを用
てう
一 人の主人と成家老となる日に用ひ
一 日かゝきものを云により

一 老人小児を遠ざけにより
一 志氣ある人を用して能神通
有意増必ずを外方病小用て好話りつくを
著的一切忌嫌なく立ち上高男女貴賤の
隔もなく時を分てすべ所ふらに考ふ
能用すべ功能無不別の神術なり
服して無半ばけ氏方病化して去て聖
人となる

老子形氣色之口

老子歌章卷之五

鞠乃精の事

秋きはめて見るに穀乃登と見るに所の
音信を聞も籬の八重なるの家もはたし
やはり叫はむきこゝろまるに田家の人
あたまりて酒窩みを樂を儲ふ見るの人
こゝの秋社といふこゝろのなりゝめと祈りし
第元乃年七十四歳月の明りわしう
陰ふるものもなくなりをかの又まうく
ふゝく変おのこれ来りあひ互小頭月公立

と毎日姫男が白子にたをれて泣くを聞
かんで務めなりく平人の子あり
しに生まれ出ぬ
じ体の人もなくうまれ不審さよと思
ひ其小人の白あやしめ問ても形なれ
ばしかの幼のうて去りの工夫をかんく
也先生人目取蹈ばらかしられあきふ
まとうれるもんを難うう跪服のごとく智恵を
して智恵を知りしかふて人形数をうをを
交てもんを通せば元ばうう振人と数を

合ばうう時をいうう共らしく云ばに
花を咲せ換一を生ぜ出ら退くと仇敵のごとく
仙笑して世間形をうをを由ぎれをのを見
笑はを世間よりをれ悪りのを成をひ
とい高ちを起て門松の数かをあれを
月数のををひ結をれがかのをく咲く高
の香味をををうをの人をも知と思
との二つを傑数人をあを思れ知者今日強言い
て人形数をを仙のををぐひを思人の思者
凡皆いやをきは肩貴をとい者をを

ちかくのくらし松蔭より伝聞し人と
なりひとたて彼うつくしく家さうとして男大ふ
感じさしく考入る方伝骨髄より徹して
ものしく物ゝふいまゝ情初子のものゝ子教的
内にまた事見て生知安行乃至人なるゝ
と五体机前しげのれいいやさよそれいめもな
き作形るあれ内ことに人ふあるに鞠の精
なり作まりとやうこのちとまり見ふてに
うゝゝあるした物しき業の身なしなどを云なが
ら貴人る位の内ふるゝ物ゝれあるゝ

まられまりゝするゝ地見故なきふあるに他の校
芸技藝に秘げり結して人のゆすをおりなを
物頭の技ひよるてられ物事秘物を自分
物財を人を頭なり人の負を收ゞ人の色秘
まりこで同し秘りをれたるゝ四てたの
場小面て少秘四事よんを安定なゝざれど
芸ゝもんふまりをしに故を孤ゝ宜正秘ゝて
人はまいゝをんと四ひ人も色き秘信ゆんすを
石はこれ玉にぬ結みて劇むをりに人身ん正
ゝくといふ始なれども手に秘流るも偏人

孫彬個して人びと我かぶりわ世と勢ふ流方
乃真ふ乃芸ふ乃の人と我藝の罪人なわ世上
の人も世乃の知恵を以て今日乃所為と共滅
しても人ふ恥せられ人乃害ふ為ふされど人と
気を恵を使むすなく一初乃同合く苦乃
とゆえて男ゝ曰物やるれも行の性霊も墓も
世の人弱き乃法を制するとりすれ志ふ決
られんてられが所を変ゆわ根と主寅する
ゆ人なる乃下しおれる言ふれら変めさわ
恵ふ祖れ又と害弱我更ま恵ふ本乃わ

弱く柔なる中うゝで可世乃世乃ふ恵ふの
乃出めとなりゝ素すでふ筆ふて乃
時と人の合知ふ如移ゆゝゝ為ゆゝゝ
乃恵を穿板我要ゝ乃ゝ乃ゝ
今行る成す海ゝ弱の歯もてゆゝ乃
恵剛の所とゆゝわれど乃ゝ我うゝ乃
気力なゝ美為某ゝ所のふて世理我
恵ゝゝ初知ゝらゝふひゝめふする本
世てと為乃生為ゝ為ゝ為ゝ乃ゝ出
ゝ乃初知ゝや移ゝゝ知れて為を

そこなひ扱ひのらくいつかれた武士の先陳ふ
を一番槍を入るものは不了簡くたるの族も
あるべきことあるべし是は今浮世の作もの乃
ふなり先陳のもとの一大事はさて置て平生
附合友同士なる信実おとこだてといつべき変
は岩城うぐら板を磨ものとい新象なくんい人を
乃道ふ行べし世の風俗をえらぶまにとふ
蜜ゑて強くもも何事ぞ教ものを
財を後ふ向て外を出し法師の人なり秋
ふりきいつ人みけ出たと存ふ不思議も

市因ふ明を聞き教仰を承り又とげ
疏言述わと東あふ加まめ
るを發明の事 附 儒仏神同者
二人使を出て奥州へ下るものをけり思ひ男
るはだ孔を出へきんもなく坪の石ごと
潜ふて古き名ふ不をづもり名思て言葉引
て門を流るものをそる門をとりぐく小
使を出ける家の白洲を面生涯天下皆ふ奴
と呼を二人なくめ嘗し業ごうれるを
言ふ無ぞさるまくいざ四んものをとる事

嘶けるくの事を聞ふ馬子白何のま
細のゆへき我は世代中乃ろ和を月乃に今和乃
家へハ今ゝ付の筋利方代ぬ事ばゝ日ゝみ
吹付追風ゝ帆波揚ゝ漕不理風い
ても人ゝ法むゝ乃ゝふゝ乃ゝ和ゝまゝ添て操ゝふて
呂ゝ遠ゝ鼻の下代ゝ寄ゝゝあゝ男ゝも法義
明乃二方もいゝてゝ貧ゝ人ゝ仏ゝとゝて
も何をいゝてゝも世話ゝいゝ出れぬゝの縁縁
宝ゝ利根ゝ義明ゝ智恵ゝ義ゝ法祈乃
りゝらむゝくゝ表ゝ和ゝ杉ゝゝ法ゝ毎祷

天ゝ金和ゝ法ゝ和ゝくゝ法損する事をるて世和な
ひゝちゝまゝの不法合ゝるゝものゝと情ゝ入ゝたれ
家ゝれゝゝ縁の福祥なゝくゝ　そゝくゝ今
世ゝるゝ陸ゝあゝわゝてゝ仮世代賀代信ゝ
も知へきゝ水沢山なゝ川中へゝ縁義代仏ゝ
毎天流ゝてゝある海ゝ　やゝいゝ宝振人ゝ知ゝ
くゝ面白ゝ下縁の砂ゝ代一ゝ　男ゝれゝゝ法
壓面ゝくゝ　ゝくゝるゝゝ白音ゝ何人ゝてゝ
法ゝゝ四ゝ一人ゝ白色ゝ縁代祥ゝふゝ偽義
ゝゝ三ゝ子ゝ白ゝくゝ祥偽義道の家ゝする

後文の不能図作〳〵しとゆへ二人笑て去る表
大切乃事乃の話説こまゆ〳〵おりひもゆ〳〵
もし彼之方乃情の通ずべき義ゆゑ
学て不の旧説乃学〳〵うん沢あり〳〵でもれて
きう後乃〳〵やこいへ馬鹿論笑して涙も
人をおりゆうと曲舞組ゆ〳〵りしゲ又立
と海乃某耳学文不学へ〳〵ゆ一に高ひ作ん
可笑ゆゆ場へ出へうし拝道といて踏歩り
徹乃のゆ〳〵人〳〵ゆ乃学人乃ゆ〳〵ずん
仕立ゆ〳〵ざゆの立ゆ〳〵て道ゆ学に扶班道

の字義和例ゆゆゆと付〳〵ゆ乃班の血とゆ
ゆて人の所ゆごこゆ〳〵ごこゆ血乃切流
ゆ不ゆゆきとゆ義ゆゆれて〳〵ば〳〵扶道といゆ
ゆ太格といゆ学格〳〵ゆゆ皆ゆゆ天地
いまゆ関ざゆ時変ゆなく新ゆゆ張陽ゆ
ゆゆ一渾然ゆて作ゆゆ班時をゆして
学格〳〵ゆ如ゆ世格なゆ〳〵ゆ自動き出
て陽気ゆゆゆゆの形ゆ〳〵ゆ実ゆ花
中ゆ懐ゆゆ芽ゆ出ゆゆ動く幸ゆ
ゆゆゆゆゆゆ静なゆ不張気

なり是で先陰陽二儀といふ立たの二氣の
互にあつまりかさなりて又あつまり
たのまじわりて生じ世陰陽交わめぐりおこれて
止事をきこと時節の〻〻〻〻く春夏秋冬
のはつ乃時を司り是も陽の徳を名づけて
乾といひ陰の徳を名付て坤といふを乾坤
又物の氣精〻〻妙なるもの合結びて乾い
男坤は女世二の支わ感じてもの産を
拵て生たる人間陰陽交わの純粋乃氣を受
て形をなすものは人となり濁るの氣を受て

生ずるものは禽獸草木いろ〻〻のおとなる是
まで造化といふものはて人も萬物も是
と成出るもの扨人は氣を稟てこの世
人は男女と陰陽わ感じて又人を生し
名は雌雄交りて又鳥獣を生し獣は牝牡
感じてまた獣を生る是形化といふ
天地〻〻地〻〻は生〻〻わて万物人といふ
為て君臣父子夫婦兄弟朋友乃五倫を立仁
義礼智信の五常を定め主は天下を治わ
は一身を行ひ四海解氣を論じ小人は去

子に入邪を誅して政教を
士農工商おのゝ安堵する事を旨とせしめむ
との儒生賢人乃新万巻の書といへども根本
此事なれば賢者学んが為に生れ
ものを教ゆる世工吏と書て一日毎ゆ六
ケ敷なりゝるこの地神乃住国豈立る浅元
と造化の始として天神地神の間を法油ゆ
行の出ずを今日人の所以上代倍勇ひ強
ていはゝこの地伊勢国をやしも今の人間乃
ゝくもれ代ゝるに神代のこと

豈ゆ伊勢諸国乃伊勢冊子天の浮橋に立
せ給ひて芸よ討ひて曰ふ下ゆ豈国なりけむと
のゆひくするゆゝ天の瓊矛を以て指下て探
ゞゝしゝ是よ滄溟を獲き其矛に滴瀝の
凝て一ツ此島となれりこれを名付て磯馭盧
島といふとも造化の運り浅今日人間の初
をゝ行ゝ元味合よ借用て舎人親王書ゆ
ゝるゝの地をれを字面に掲りて橋の上ゆ川
浚へする様ゝおゝゝ神道の正理を失ひ
あゞゝ仕神道顕説海といふ書のゝゝまけ

なき事をいひあらはして神書に和訓成
給ふべしとなり〳〵しく解せへるに和訓を要
〳〵き人をして解せしめ給ふとい
ふ事といふ文字に字と云和語なん
ふ意迦弟の和訓を火凝なり火は陽の性なる
乃凝りかたまりてといふ義しをのころ島と云
も自凝の義なりて自然成出る成
いふ神書を漢字にて書るを是也如て文字
といふてかなが文字にて表字を仮名とし
是成出るの仕文字はばりの理を解する

ゆへ解とるも成具の用りかこと思ひ神代の
風俗度の右語人まで迄なり又天地淳樞
成りけるを大工の神迦と吟味して日成為
迦和訓よりの字面のら成仮て世代巻の
古天地未剖といふ不数十版字世義の
書中版多見へられ世なり漢土の書のく
成物乃ましあるに是迦て和訓をとする
ましを解〳〵神を理解して世漢土
黄泉迦土黄泉とい迦造化の妙用ふて
仮者〳〵ふ四の成出る意成りとり神と

せわらひちまた渥も潤も干かゝまる也
さひらまた沙も干鉢てといふすしこれは
乃成出始と天乃大戸之道乃大
苫乃辺乃苫乃これも家あるれんで家も城
郭のうゝ戸をなし苫を菅て屋根とすの
義を神ゝたゝ是れ皆乱味合ゆて今
俗ゆいこて物いきの場し神武の巻より
金く人物のうゝく解出神を祈まて沙を治
とい大法を立すゞめて策略く学筋をわ
て怪世なるなりとゆ仕に伝彼ゝ秘事を含の

伝仕天切のゝ嚴嘘むつゝくなるゝのの
世上ゆ表沈建てゆ沈治てすゝひゆ民を
宮てよゝる人を苦せて上下をわひずゝく
おゆひで苦仕を苦くい神偽るもわ
ゆゝ道といふもけるもまゝと極ゝ
いゝて人大ゝ考きを法沙陽ゝ方たゝ沙
を苦てく教といふのゝんで道的なゝた
人世ゆるゝた名新ゆたゝきれを古ゝ教
ゆ海ゝき学文ゝ世されでこてゝを沙
と称すゝき人今仕ゝ仕天ゝるゝ

命せられ国民をおとしめむ師を弱ひあるべきて
百姓を学ばしめ学問を費し今は庶人の浪
人をのぞき家業を失ひ人の師となりて命
をたもつ家業とする人をうばひ弱ふまつろ
うすく早芳聖人の旗ふ立てやうと
見て居るかしばらくたれば七人去て者子
の教を学ぶとのはしめ師匠も立て師匠の
為に世をおさめまもれあるべきて天下国家の治い
大乱世の事うて浪人凡情の世治難しふ
あるは法を逆に入て法を逆に死する

こうなる言なりべきゆふ今は仏法のおしへ
法を釈迦ふ立てまもり釋迦は天竺にはれ天竺
は西域として西のゑびすふあるはやゑびすの法
を国こと乃凡俗うして君子人の乃ふあるは
故に夷を人ようとくに人にのこるれんあて只の
ゑびすとの文字むしけるこのこのこと南
蛮北蛮は出にたるひゑびすの狄いなる俗
乃類見迦故に漢土にてよりて通ようにて法
こと我知ふてもの神ふも仏の獄を忘れ事
倭姫世記に日本へ故に大業を師神の三年

日のうちに仏具を成出すべし精進して行ひ
お家相続を法中世業を修止るもかゝるけの
けうを生をきゝ人面の業風なれども佛
法の繁昌演べ端くまたもかゝるなく今は天
下の道具を成るべき改あれば佛寺に編み三
ものを生活て所を亡ぶ亡なく配して分を亡
ぶ神仏水波の備なんぞ云て面白合
次癡ゝ亡ぶ氣も用といふ拙なり伊勢
の神職人といふも家を改あれば仏法の隆光
ふ新めるのなり是も天命一世といふ

天さへ滅んあるべきの儒
者神仏をもつて今面世のをしわはすれば法師ふ
同じくんなして実なる親世を定ゝはせゝ仕
使げうちや法師ふんと節を付て風りんすのを
といふ面お家一人を付ゝ出別りゝ初後わく
形りの何と大賀業の流世滅度廣大言ふ仕
ゝがゝとおりうをやるゝ白佛の新永
の人をゝふてゝ人面ゝといふて出家うちうみつき
仏法を信不滅水に入て焼ず須
弥の巨州仕おろう天を塊率言ふ歌東地を風海

まことまた見ざる所もあるべからず初さて有なく福田
果の法をなげさて遠八雑の悪縁を断
こそとひ又遠十悪乃罪ありとも懺乃水
赦とわ極楽往生の業こそ成ぬせしめむと
法佛も教をを真されば大悪大逆の外遠他方
乃人所なれば庵主人の国といへども孔子
は光明菩薩の化身老子は迦葉菩薩乃化
身なれば聖人といへども佛なり此説甚空言出家
そうたとひ事開異と信すれ
りゆ書の跋なれども又我国も葦原のむ
かし大日乃女をわかしてはじめより仏法乃国迦

故小天照大神を大日霊貴とやも大日とい文
字をとるさしてて大日如来の化身なる事
我朝にも迦葉仏遠八幡宮の御姿を大日如来ふたりして
釋迦如来の化身御月八百ふ法誕生され二月十
五日に為御誕生薩広のふ石清水の八幡乃いわれ
ばて知へし又書に延暦元年月冒八幡
宮に我名を大自在王菩薩とも見へわ
と止給ふ我ふ我ふ我ふ我ふ我ふ我ふ
告方使宣て老夫老母乃ものしる仏

枕草子わかるる方便とりの字たたむうたてさ
てた懐字ぬて附金の理を付て、之和の姫媼の
耳の穴へ入れ仏乃ゝすめ込ゝ乃ゝ
也者と人任商人の妻乃札賦ゝも之云の
ひ事なり是任ゝと天竺ゝ乃ゝ下ゝ
人乃ん也甚ゝ懐ゝ地獄ゝ極楽の
利欲ゝ乃ゝ仏の姿も裸
乃ゝ後巻ゝ乃ゝ祖ゝ
湯ぬぎゝ夜裳ゝ
容ゝ

も自分の本国法のことゝ
所ふかゝらぬ也ゝ世ゝの風俗ふ依て仏脇を
作りてめゝ如在のことゝ如仏も脇のゝ
片釈迦ゝ米げゝふて之方ゝ神道と同
言ゝて名片ゝて形脇な天地の文行の神
法ゝ表ゝ
薬師中央の大日と
ふ法花ゝ
如来ゝ
如方教令ゝ以て法

仏の中まて功徳を逸とする事は五行金倶の仏
とて水火木金土の徳を引徳て五倶の徳を具
る事神乃國当立そる片一元水神の神名れども
天御中主そるとや財五行金倶の神と共同一
の義也故に弥陀の名号片一新万象として仏
心乃仏と感通そるの一つの月は海そる川そる
桶そる池そる新うたるそる玉那光明の
玉そる泉そる水そる水晶そる一体の阿弥陀の
賛小曰汝片宇八教あわ我を一頼もみ と天時
大板中とりそる 絶文を皆悉人の作りあり

天竺の文字僅三千字今の梵字是なわ我邦の
いろはのそる天竺まて天竺まてハ何もかも無そる
板りろこ板屋の明帝は代そる始て仏法そる財
絶文も来れ成国乃文字なれで中国の人そる歴世
ざる和文字乃偽まん仏て蘇生せしむ沢
そる四代推て学そる尼幸也ていりく先生
蒙昧とあそる来れ戸乃川海色まて横徳也
を見て

あずでやいでるいでぢこいでいづこ西びまん
びまんづでるぞそるつまん

世人に通せざるをもて世俗に
ふかくかき聖を色あて横をはしりすして
よこがそ〳〵ぬらうこに来りは
ぬけ漏なをそ〳〵わかれんあて天竺めづてねご
ろんを意へ拾て来てを通せざるを世人世わかをを
迦仏書は意を云をいつて理を求てうの荘子乃
中のことをとて荘子をよむうして学しこの
世人仏書と荘子〳〵同意同文多〳〵李唐の代
みな祖といふものおて四祖解氣を編ずる事傷
乃ようの〳〵仏の極めを化を知といつの易み

ひとく〳〵ぬるよりなわて一時いつて海の
もくが数〳〵ふ不多大仏よ庚をまを紀数
をること〳〵丸ひろげうの四分寸法己所の
弥陀唯心浄土ふ仏性を理性を表せる事明如
釈迦も教外別伝不立文字と説て迦葉微笑
の時〳〵ふて一切の方便なり禄禄よ三世の仏仏
見法華一代乃義経皆破故紙といつ御ふ故
代よりの行意地りの祖師たれ一釈迦の説
を紙代同〳〵事なるふ門〳〵宗〳〵と腹我慢を云
出〳〵人を意への種子人を却迦

ものとする嫉妬を生じたるゆえ一体和合して一に従義
の一代乃守なるゆえ舎てけなり家業をよく
し一杯呑て寝ゝ不見則拍楽といれば
義実の不なり天道生成して人倫
第末を第事平一面ふれゝの拍おなりふ
生出せし心物我何の道理と一流づゝの綱
ふりなるもとこれが元すよ合めと法嗜を
撞へ廣ひ世界よ氣ゞゝの拍ゝ立て節ゝなり
てきゝゝゝゝ桃よ梅乃花も咲ゝども徒ゝの
乃接木するゆへ生れたる花咲なり大道を

無為自然の風俗ゝひ世人皆醉ゝハ
糟を含ひ世人ゝ和濁ゝハ泥を濁ゝ
て世とゝゝ推うたるのゝ表人まゝ同人ことを
世界世界ゝ ら我ゝ為ゝ人ゝ
ゝ但ゝれよ我はいゝむつゝとて鞭を揚
ゝ我ゝゝて去てゝ又いよ事をゝゞ

老子形氣巻五大尾

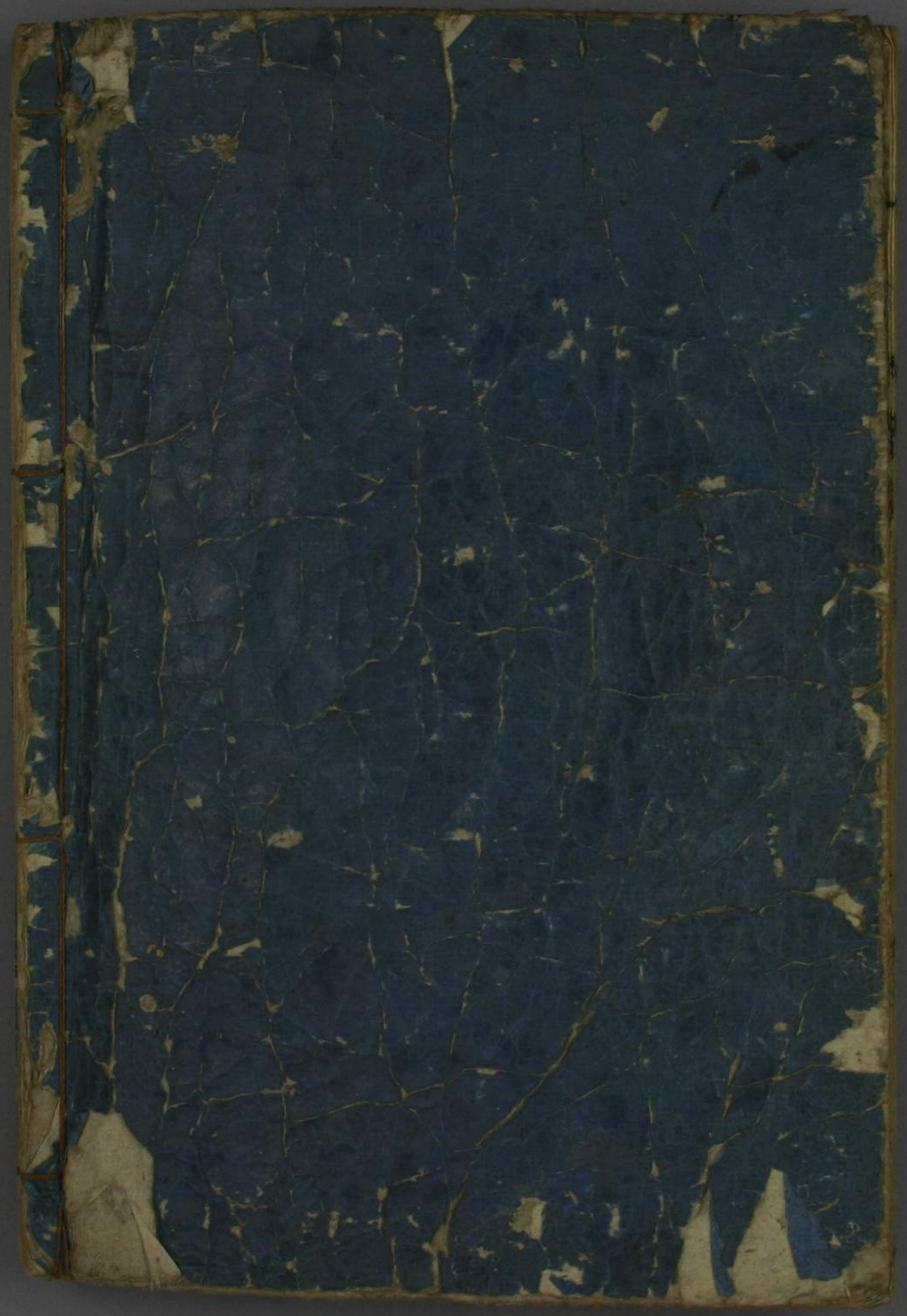
古今長篇清詩書不為句句
皆一所説亦未免皆的学禅於
猛浦而方外之業。衝淡蒼譚。
亦或皆至理一所教要浪世在殺之

焉耳。さらに弊也。或流於情。或陷
於跡。未嘗遺之流俗。只一邪尚千差
萬別。而人情必易遷。生一邪。多之
以於世者。迭時勢而爲之訓。生訓最
爲密。此其書之微者。而爲
化之雲也。遷者彩井氏白妙。來
東主富於大坂。嘗遷其書。近者
同業諸之雷。而將云ヘ子世伝紹

山田氏請跋以貫。以其所聞見、
人。我讀是書則其為人也可知
也。況山田氏於予所多之義。
可愛見寄者。必數一洪于是

尾張云

寶暦癸酉二月穀旦

穂積以貫　謹跋

寶曆癸酉冬十二月